

鈴鹿市
上箕田遺跡（第7次）発掘調査報告

2008年9月
三重県埋蔵文化財センター

序

鈴鹿川の河口付近には、伊勢湾西岸地域でも有数の面積を持つ平野が広がっています。この平野では、古くより人の営みが行われてきました。これまでこの地域で行われてきた発掘調査では、縄文時代から江戸時代にかけての土器や石器、陶磁器などが多くみつかっております。

今回報告を行う運びとなりました上箕田遺跡の第7次調査では、主に奈良時代から戦国時代にかけての人々の生活の痕跡を確認することができました。一方で、それより古い縄文時代や弥生時代、古墳時代のものはほとんどみつかりませんでした。自然環境の変化や技術の進歩とともに、徐々に生活域を拡大していった先人たちの姿をそこに見ることができるのではないかでしょうか。こうした発掘調査の成果が、この地域の歴史像をより豊かなものとするために寄与できることを願っております。

最後になりましたが、調査にあたって多大なるご理解とご協力をいただきました地元の方々をはじめ、鈴鹿市考古博物館、三重県農水商工部の方々に厚く御礼申し上げます。

平成20年9月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

例　　言

- 1 本書は三重県鈴鹿市中箕田町に所在する上箕田遺跡（第7次調査）の発掘調査報告書である。なお調査次数については、三重県立神戸高等学校郷土研究クラブによって行われた第1次調査以来、上箕田遺跡調査会・鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市考古博物館・三重県教育委員会等によって上箕田遺跡で行われたすべての調査を通じた番号となっている。
- 2 発掘調査は平成19年度鈴鹿川沿岸2期地区経営体育成基盤整備事業に伴って行われ、調査にかかる費用は三重県農水商工部が負担した。
- 3 現地での調査は平成19年度に三重県埋蔵文化財センターが主体となって行った。本調査として発掘調査を行った面積は650m²である。
- 4 発掘調査は下記の体制で実施した。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター調査研究I課
技師	石井智大
臨時技術補助員	川崎志乃
土工作業受託者	株式会社浜口リピック・株式会社四門
- 5 本書には、本調査の成果に加えて、当該事業に伴って行った範囲確認調査及び工事立会調査の成果についても記載している。
- 6 本書の執筆は第II章第3節・第III章・第VI章第1節を川崎志乃が行い、それ以外を石井智大が行っている。全体の編集は石井が行った。
- 7 現地における発掘調査や整理作業、そして本報告書の作成にあたっては、地元の方々をはじめ、鈴鹿市考古博物館、三重県四日市農林商工環境事務所にご協力をいただいた。記して感謝いたしたい。
- 8 上箕田遺跡の発掘調査に関わる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。ご活用願いたい。

凡　　例

- 1 本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「鈴鹿」、鈴鹿市発行の1:2,500都市計画図などの地図類を用いている。
- 2 本書で用いた座標は世界測地系に基づくものである。
- 3 本書で示す方位はすべて座標北を用いている。
- 4 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄（編）1997『新版標準土色帖』（19版）日本色研事業株式会社に拠る。
- 5 本書では、以下のように遺構の略記号表記を使用している。
SK：土坑 SD：溝 SE：井戸 SZ：落ち込み・性格不明遺構
Pit：小穴・柱穴
- 6 遺物実測図の縮尺は基本的に1/4としているが、石製品・金属製品などの小型遺物については1/2としている。これらの縮尺については図中スケールにて明示している。
- 7 遺物観察表の凡例については、観察表の下に記載している。
- 8 写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応している。なお、遺物写真の縮尺は不同である。

目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	3
第3節 調査の経過	3
第Ⅱ章 周辺の環境と既往の調査	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3節 上箕田遺跡における既往の調査	8
第Ⅲ章 基本層序	12
第1節 旧地形の把握と地層観察の方法	12
第2節 調査区の基本層序	12
第Ⅳ章 調査区の概要と遺構	15
第1節 調査区の概要	15
第2節 遺構	19
第Ⅴ章 遺物	24
第1節 本調査の出土遺物	24
第2節 その他の出土遺物	27
第Ⅵ章 調査のまとめ	32
第1節 地形環境の復原	32
第2節 遺構・遺物からみた上箕田遺跡東縁部の様相	37
第3節 結語	39

図 版 目 次

第Ⅰ章 はじめに	
第1図 範囲確認・工事立会調査箇所位置図	2
第Ⅱ章 周辺の環境と既往の調査	
第3図 周辺遺跡分布図	6
第4図 過去調査区位置図	9
第5図 第3次調査出土木製鋤未製品実測図	
	10
第6図 第3次調査出土木製鋤未製品出土状況	
	11
第Ⅲ章 基本層序	
第7図 調査区土層断面図	13
第Ⅳ章 調査区の概要と遺構	
第8図 調査区①平面図	15
第9図 調査区③平面図	16
第10図 調査区④平面図	16
第11図 調査区⑤平面図	18
第12図 工事立会調査平面図	18
第13図 S D 1 土層断面図	19
第14図 S D 2・3・6、S K 5、S Z 4 平面図・土層断面図	20
第15図 S Z 7・8・10平面図・土層断面図	
	21
第16図 S E 9 平面図・土層断面図	22
第V章 遺物	
第17図 遺構出土遺物実測図	24
第18図 遺構外出土遺物実測図①	25
第19図 遺構外出土遺物実測図②	26
第20図 工事立会調査遺構出土遺物実測図	
	27
第21図 工事立会・範囲確認調査遺構外出土遺物実測図	28
第VI章 調査のまとめ	
第22図 上箕田遺跡の調査区と周辺の地形	
	33
第23図 第7次調査土層断面模式図	33

表 目 次

第1表 上箕田遺跡調査次数一覧表	8
第2表 遺構一覧表	23
第3表 土器・陶磁器一覧表	30
第4表 土製品一覧表	31
第5表 石製品・金属製品一覧表	31

写 真 図 版 目 次

写真図版1	43	調査区⑤中央部分全景（西から）	
調査区③～⑤遠景（南西から）		調査区⑤東側部分全景（西から）	
調査区①調査前状況（東から）		写真図版4	46
調査区③～⑤調査前状況（西から）		S D 1 検出状況（調査区③）	
調査区①全景（東から）		S D 1 土層断面（調査区③）	
写真図版2	44	S D 1 掘削状況（調査区④）	
S D 2（西から）		S D 1 掘削状況（調査区⑤）	
S D 2 土層断面（南から）		調査区③西端土層断面（南から）	
S D 3（西から）		調査区④東端土層断面（南東から）	
S K 5（東から）		S E 9 土層断面（南から）	
S D 6（東から）		調査区①工事状況（西から）	
調査区①東端土層断面（南東から）		写真図版5	47
調査区②全景（南から）		本調査・範囲確認調査出土遺物	
写真図版3	45	写真図版6	48
調査区③全景（西から）		工事立会調査出土遺物	
調査区④全景（西から）			

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

鈴鹿川下流域には伊勢湾西岸地域有数の面積を持つ沖積平野が広がっており、豊かな水田地帯となっている。これら多くの水田を営むためには、各水田への安定した農業用水の供給が必要である。そのため三重県農工商部の四日市農林商工環境事務所では、鈴鹿川沿岸2期地区経営体育成基盤整備事業として、鈴鹿川下流域に存在する農地288haに対して用水補給を行い、高度な農地利用の促進および農家経営の安定を図るという目的のもと、用水路30,588m、農道16,595mの整備を行っている。

この事業の対象となっている地区においては、営農の体系では個別経営の自己完結型農家が多い。しかしながら、農業従事者の高齢化及び後継者不足が深刻な問題となっている。こうした当該地区的状況を踏まえた場合、地区の農家への作業受託をよりスムーズに推し進めていくことが農業振興上の重要な課題の一つであると考えられる。

そのため、鈴鹿川沿岸2期地区経営体育成基盤整備事業では、現在の開水路をバイオラインにし、給水施設についても自動給水栓での対応とするための工事を行っている。この工事により、各圃場レベルの水管理作業の省力化を通じた農業経営の合理化が可能となり、また、現在は開水路となっている部分まで道路を拡幅することも可能となるため、当該地区での農作業上における機械化にも十分に対応できるものと考えられる。

こうした一連の事業の展開にしたがって、鈴鹿市大木ノ輪遺跡・上箕田遺跡・上箕田北遺跡等の周知の埋蔵文化財包蔵地が存在する地域についても上記のバイオライン等に隣接する各種工事が行われてきており、これまでに大木ノ輪遺跡等において関連工事に伴う発掘調査が行われてきた⁽¹⁾。平成19年度には、上箕田遺跡の範囲内および隣接地において工事が行われることとなり、その対応が迫られることとなった。

そのため、平成18年度には次年度のバイオライン

工事に先立って、三重県埋蔵文化財センターが工事予定箇所において範囲確認調査を行った（第1図H18範囲確認調査坑）。その結果、複数の調査坑において遺構・遺物が確認されたため、それらの箇所を中心に平成19年度に本調査を行うことになった。

平成19年度にも範囲確認調査を行い（第1図H19範囲確認調査坑）⁽²⁾、それによって調査範囲を決定した上で、本調査を行った。調査体制については、例言に記した通りである。また、本調査以外にも当該事業に伴って上箕田遺跡・上箕田北遺跡周辺地域で工事立会調査を行っている（第1図）。

なお、この発掘調査に関する文化財保護法等にかかる諸通知は以下のようになっている。

<文化財保護法等にかかる諸通知>

文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条
第1項

平成19年10月3日付け、四農環第3145号（県教育長あて県知事通知）

文化財保護法第99条第1項

平成19年10月25日付け、教理第246号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

遺失物法にかかる文化財発見・認定通知

平成19年12月6日付け、教委第12-4-10号（鈴鹿警察署長あて県教育長通知）

註

(1) 三重県埋蔵文化財センター2008「大木ノ輪遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財調査報告296

(2) 以下、範囲確認調査において設けた調査坑を範囲確認調査坑と呼び、平成18年度に実施したものについてはH18、平成19年度に実施したものについてはH19を冠して記述する。



第1図 調査確認・工事立会調査箇所位置図 (1:5000)

第2節 調査の方法

調査区の設定と呼称　調査区は、バイブルайнの配管を埋設するために掘削を被る部分に設けた。ほとんどが現況の道路路肩部分にあたり、側溝が既設されている場所である。管の埋設という工事の性格上、調査区はおよそ幅1.3mの細長いものとなっている。ただし、道路の交差点については交通上の安全等を考慮して掘削していない。そのため、調査区はこうした交差点の未掘部分によって大きく5つの区画に分けられる（第2図）。現地調査時には、便宜上この5つの区画に調査区①～⑤までの名称を与えており、調査も個々の調査区の単位ごとに行った。本書でも、この調査区名称に従って記述を行う。

なお、調査区⑤については電柱が存在する部分が掘削できなかったため、そうした未掘部分を挟んで東側・中央・西側の3つの区画に分断されている。掘削　現地調査における掘削作業は、主に重機によって行った。まず道路造成時の造成土及び近世の遺物包含層を重機で除去した後に、古代～中世と考えられる遺構面において、人力で遺構検出作業を行った。そして、その後に各遺構を人力で順次掘削していった。

近世の遺構は古代～中世と考えられる遺構面より上層で検出されたが、重機での掘削作業の関係上、近世遺構面で掘削を中断して近世の遺構を全面検出することは困難であったため、一部を写真撮影及び土層断面観察のために残し、他の大部分は記録を取りながら除去していった。

なお、過去に今回の調査地付近で行われた鈴鹿市による調査では、縄文時代の遺物・遺構の存在が確認されているため、今回の調査でも調査区の一部を古代～中世の面より掘り下げて、下層における遺構・遺物の存在や土層の堆積状況についての確認を行っている。

遺構番号の付与　今回の調査では、ピットを除くすべての種類の遺構に、通し番号で1から順に遺構番号を付与した。表記時には、遺構番号の前に、凡例で示したようにS K、S Dなど遺構の種類ごとの略称を付している。

ピットについては土坑や溝などの遺構とは別扱いとし、独自に通し番号を付与している。また、調査区の番号を先頭に付して、どの調査区で検出されたものかが分かるようにしている。

第3節 調査の経過

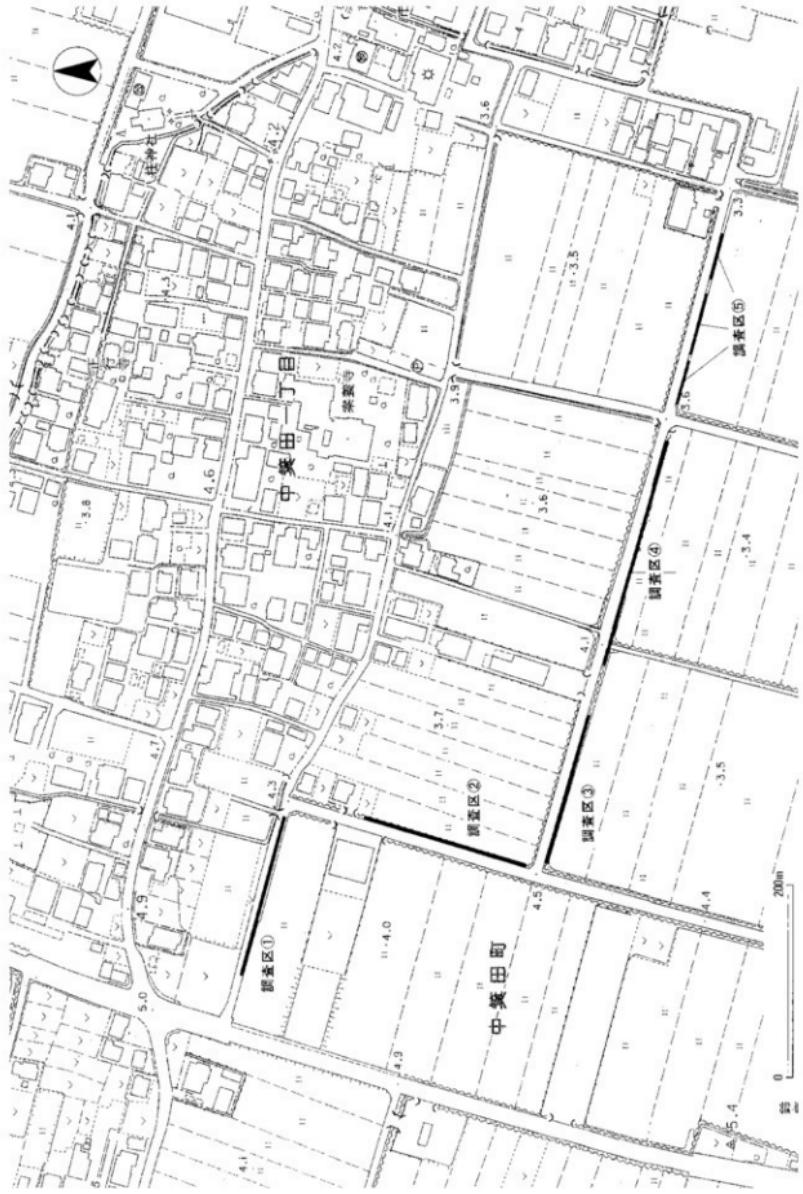
現地での発掘調査は、平成19年10月23日・24日の範囲確認調査に引き続き、10月25日より開始した。調査は、通行止めに伴う近隣の通行への影響などに配慮し、調査区③から開始した。10月25日には調査区③の重機による表土掘削を開始し、その後調査区④、調査区⑤、調査区②、調査区①の順に調査を行い、11月19日には調査区①の全面作成作業等を最後に現地での作業を終了した。

なお、本調査終了後、平成19年12月25日から平成20年3月6日までの期間の間に工事立会調査を行っている。

本調査における現地作業の開始から終了までの調査進行の概略は、以下の調査日誌（抄）の通りである。

＜調査日誌（抄）＞

- 10月25日　調査区③表土掘削開始。S D 1 検出。
10月30日　調査区③の調査終了、埋め戻し。
10月31日　調査区④表土掘削開始。
11月2日　調査区④の調査終了。
11月5日　調査区⑤表土掘削開始。
11月8日　調査区⑤の調査終了。埋め戻し。
11月12日　調査区②表土掘削開始。
11月13日　調査区②の調査終了。
11月15日　調査区①の表土掘削開始。S D 2 検出。
11月16日　S D 3・S Z 4・S K 5 検出。遺構の個別写真撮影。
11月19日　S D 6 検出。調査区①の調査終了。機材撤収および現地引渡し。



第2図 調査区位置図 (1:2500)

第Ⅱ章 周辺の環境と既往の調査

第1節 地理的環境

上箕田遺跡は鈴鹿市上箕田町・中箕田町に存在している。この地域は、流域面積約300km²ほどの規模を持つ鈴鹿川の下流域南岸に広がる低平な沖積平野の中に位置しており、上箕田遺跡の3kmほど北側には、現在の鈴鹿川が流れている。

鈴鹿川の流路は過去幾度となく変化してきた。現在でも河口付近には鈴鹿川派川が分流しているが、古くには何本もの流路に分かれていたこと也有ったようだ。上箕田遺跡の南方にあたる柳・土師などの地区にはやや大きな流路が存在していたことが推定される。また、その南に流れる金沢川も鈴鹿川の分流であったとも考えられている⁽¹⁾。

鈴鹿川下流域には、こうした鈴鹿川による堆積作用によって形成された地形が広がっている。鈴鹿川の河口付近には三角州地形が発達しており、標高5m以下の中地となっている。上箕田遺跡付近にも標高5m前後の低い平野が広がるが、その中に点在する細長い微高地の多くは、鈴鹿川やその分流によって形成された自然堤防の一部であり、現在の集落にはこれらの自然堤防を中心として形成されているもの

が多い。一方、こうした三角州を中心として形成されている標高5mほどの低い沖積平野に対して、上箕田遺跡から3kmほど西方の神戸・須賀より西側には、鈴鹿川によって形成された扇状地が標高10~40mほどの低・中位段丘となって広がっている。

また、上箕田遺跡は比較的海に近い場所に立地している。現在でも、海岸からは1~2kmほどの距離である。先に述べたように上箕田遺跡付近の地表面の標高はかなり低く、過去の海面が現在よりも高かった時期には、おそらく上箕田遺跡付近まで海岸線が入り込んでいたものと思われる。鈴鹿川河口付近の海岸は基本的に砂浜となっており、上箕田遺跡付近ではあまり顕著ではないが、やや南方の金沢川付近では海岸線沿いに高さ1.5~2mほどの砂堆が形成されている部分もある。なお、この金沢川の河口南側には、砂堆に近接して標高45mほどの岸岡山丘陵が独立丘陵として存在している。

註

(1) 鈴鹿市教育委員会1980『鈴鹿市史』第1巻

第2節 歴史的環境

今回の上箕田遺跡の調査では、様々な時期の遺物・遺構の存在が確認された。上箕田遺跡やその付近では、これまでにも各時代にわたる人間の活動の痕跡が確認されている。

古代以前 上箕田遺跡の位置する低地部では、縄文時代の遺構・遺物の発見は極めて少ない。これは、前節でも述べたように海岸線が現在よりも内陸部に入り込んでいたこととも関係するものと思われる。しかしながら、縄文時代晩期頃には当該地域でも人々の活動が行われるようになったようである。上箕田遺跡では、縄文時代晩期の突帯文土器が出土している。

弥生時代になると、上箕田遺跡やその周辺では、自然堤防などの微高地を中心として人間の活動が活

発化していく。上箕田遺跡の北に位置する大木ノ輪遺跡(18)では弥生時代前期の土器が多量に出土しているほか、上箕田遺跡でも弥生時代前期の土器が多く出土しており、弥生時代前期には当該地域に集落が展開し始めていた様子が窺われる。

弥生時代中期にも引き続き、大木ノ輪遺跡・上箕田北遺跡(19)などで遺物が出土している。上箕田遺跡においても、過去の調査で遺物や方形周溝墓などの遺構が検出されている。上箕田遺跡付近では主に中期前葉～中葉の遺物が多く、中期後葉の遺物は量的にやや少ないようである。なお、中期前葉には扇状地端に位置する須賀遺跡(14)で環濠とともに思われる溝が検出されており、鈴鹿川下流域一帯に広く集落が展開していたことが窺われる。



第3図 周辺遺跡分布図 (1:50000)

弥生時代後期には、上箕田遺跡・大木ノ輪遺跡などの遺物の出土量が増加する。ただし、後期前半の遺物はほとんど見られず、後期後半の遺物が多い。上箕田遺跡で過去に出土し注目された銅鋸形土製品も、当該期のものと考えられる⁽¹⁾。また、上箕田遺跡よりやや南の金沢川下流域の深田遺跡（37）や岸岡山Ⅲ遺跡などでは弥生時代後期後半の住居跡が検出されている。特に岸岡山Ⅲ遺跡では多数の住居跡が検出されており、この時期の大規模な集落であったものとみられる。

弥生時代終末期には、上箕田遺跡やその付近では土器の出土は確認できるものの、その量は決して多くはない。土器の出土は上箕田遺跡のほか、大木ノ輪遺跡・神大寺遺跡（24）などで確認できる。金沢川河口部に位置する双ツ塚遺跡（40）などでは当該期の住居跡が確認されており、また岸岡山丘陵上の岸岡山Ⅲ遺跡でも後期に引き続き居住域が形成されている。主な居住城は、上箕田遺跡付近の低地部で

ではなく、その周囲の低・中位段丘上や独立丘陵上などに形成されていた可能性がある。

古墳時代の集落の様相は遺構があまり検出されていないために明確ではないが、天ノ宮遺跡（21）では古墳時代前期の遺物が出土している。その他にも、神大寺遺跡・大木ノ輪遺跡・上箕田遺跡などで古墳時代前期から後期にわたる土師器・須恵器などの遺物が出土している。やや南に位置する双ツ塚遺跡では古墳時代中期の堅穴住居などが見つかっており、金沢川周辺に古墳時代の集落が展開していたことが窺われる。天王遺跡（44）では古墳時代後期～終末期にかけてのものと思われる大規模な溝が検出されており、運河のようなものであった可能性も指摘されている⁽²⁾。

古墳も上箕田遺跡周辺ではほとんど確認されていない。どちらかといえば古墳が多く造営されているのは鈴鹿川下流域北岸に広がる丘陵地帯であり、高岡古墳群（6）などが展開している。鈴鹿川下流

城南岸においては、低平な沖積平野部では古墳は確認できず、岸岡山丘陵ないしはその周辺に古墳が築造されている。岸岡山丘陵には中期末～後期にかけて營まれた岸岡山古墳群が存在しており、前方後円墳も含まれている。また、岸岡山丘陵の北側には塚越古墳群が存在している。塚越1号墳（42）からは画文帶神獸鏡や振文鏡などの遺物が出土したとされており⁽³⁾、古墳時代後期の当該地域における有力者の墓である可能性が考えられる。

古代 古代には、上箕田遺跡周辺の地域は河曲郡に属していた。鈴鹿川下流域南岸の沖積平野では水田開発が積極的に進められ、条里制も広範に施行されていたと考えられる。この地域の条里は、現状で確認できる地割りから見て、南北方向からおよそ20°東に振った方向に主軸を持っていたものと想定されている⁽⁴⁾。こうした条里が形成された時期については明らかになっていないが、上箕田遺跡や大木ノ輪遺跡でも奈良時代の須恵器が出土しており、古墳時代から継続的に当該地域において人々の活動が行われていたようである。

また、鈴鹿市内には伊勢国分寺跡など、飛鳥～奈良時代にかけての重要な寺院がいくつか存在しており、市内の各所で古代の瓦が出土している。天王遺跡では重弧文軒平瓦が出土しており、また土師南方遺跡（30）でも單弁八葉蓮華文をもつ山田寺式系の軒丸瓦が出土している⁽⁵⁾。これらの遺跡が存在する地域にも当該期の寺院などの存在が予想されており、天王遺跡で検出された奈良時代の堅穴住居や掘立柱建物群は、それらに関連する集落である可能性も考えられる。

平安時代になると、上箕田遺跡周辺では、まず大木ノ輪遺跡での多量の縄釉陶器・灰釉陶器の出土が特筆される。縄釉陶器は、9世紀後半～10世紀頃の幅広い時期のものが出土している。上箕田遺跡では縄釉陶器の出土量は大木ノ輪遺跡ほど多くないが、灰釉陶器の出土量は多い。

こうした施釉陶器の多量の出土は、この地域に何らかの重要な施設ないし集落が存在したことを見ているものと考えられる。鎌倉時代～室町時代に成立したと考えられる『神宮雜書（皇太神宮建久已下古文書）』などによれば、平安時代末期には当該地

域周辺に、伊勢神宮領莊園である御厨の一つ「箕田御厨」が設置されていたとされる⁽⁶⁾。箕田御厨の設置自体は出土する縄釉陶器・灰釉陶器とは年代的に整合せず、これらの遺物との直接的な関連は考えにくいが、当該地域の莊園化は早い時期から始まっていたとみられる。また、下箕田町には式内社である久志志弥神社が存在している。こうした莊園・神社などと関連するような施設・集落等が存在していた可能性も想定されよう。

ただし、発掘調査によって検出された当該期の遺構はあまり多くはない。上箕田遺跡では複数の掘立柱建物などが検出されているが、特筆されるような遺構は今のところ上箕田遺跡の周辺の遺跡においても検出されていない。

中世 古代に引き続き、中世においても当該地域は鈴鹿川下流域南岸の平野部の中で重要な位置を占めていたようである。上箕田遺跡・大木ノ輪遺跡をはじめ、周辺の各遺跡では中世の遺物の出土量がかなり多い。大木ノ輪遺跡では鎌倉時代に属すると考えられる溝や掘立柱建物なども検出されている。

また、上箕田遺跡や大木ノ輪遺跡で多量に出土する山茶碗の中には底面に墨書を持つものが多数確認できる。青磁・白磁などの輸入陶磁器もかなりの数が出土している。こうした遺物の出土からみて、鎌倉時代には大木ノ輪遺跡から上箕田遺跡にかけての地域に何らかの重要な施設が存在していたことが推定できよう。先に述べたように伊勢神宮領莊園の箕田御厨がこの地域に存在しており、こうした御厨と関連する施設の存在も想定される。この地域の御厨は、林崎御厨が源賴朝によって保護された例もあるよう⁽⁷⁾、鎌倉時代にも伊勢神宮領として存続していたようである。

室町時代には、上箕田遺跡の付近に上箕田城（26）が築かれた。上箕田城は伊勢守護であった世保氏（元は美濃の土岐氏）の本拠地であり、15世紀前半頃には上箕田城近辺に守護所が設けられていたものと考えられる。上箕田城の位置については、今回の調査地にも近い上箕田遺跡東部に推定されているものの、関連遺構などは未検出であり、正確な位置は不明である⁽⁸⁾。

近世 近世には、当該地域に関わる文献記録が検地

に関するものなど比較的多く残されており、上箕田・中箕田・下箕田・南林崎などの、現在に至るまで存続している集落が成立していたことが知られる。これらのうち、上箕田・中箕田・下箕田の地域については、江戸時代にははじめ津藩領であったが、寛文9年（1669年）に津藩からの久居藩の分藩に伴って久居藩領となった。

これらの集落には中世末期から近世前期に創立したとされる複数の寺社が存在しており、今回の調査地の北側の中箕田集落内にも安養寺・正行寺などの寺が現存している⁽²⁾。

註

（1）鈴鹿市教育委員会・上箕田遺跡調査会1970「上箕田

弥生式遺跡第二次調査報告」鈴鹿市文化財調査報告
第2回

（2）鈴鹿市教育委員会2002「天王遺跡（第5次）発掘調査報告」

（3）竹内英昭2005『古鏡』『三重県史』資料編考古1 三重県

（4）鈴鹿市教育委員会1980『鈴鹿市史』第1巻

（5）三重県教育委員会1973『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告15

（6）鈴鹿市教育委員会1980、仲見秀雄1983『鈴鹿市』『三重県の地名』日本歴史地名大系第24巻 平凡社

（7）鈴鹿市教育委員会1980

（8）鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会1993「上箕田遺跡」鈴鹿市埋蔵文化財調査報告12

（9）仲見秀雄1983

第3節 上箕田遺跡における既往の調査

①既往の調査

上箕田遺跡では、過去6回の発掘調査が行われている（第1表、第4図参照）。

第1次調査⁽¹⁾は、1960年の狩風土器発見を契機として神戸高校郷土研究クラブによって実施された。遺構としては、溝・杭列・貯蔵穴などが検出されている。遺物は弥生時代前期～後期の土器・石鎚・石斧・木製椀などが出土している。また貯蔵穴からは、拳大の大きさで塊状になった炭化米が多量

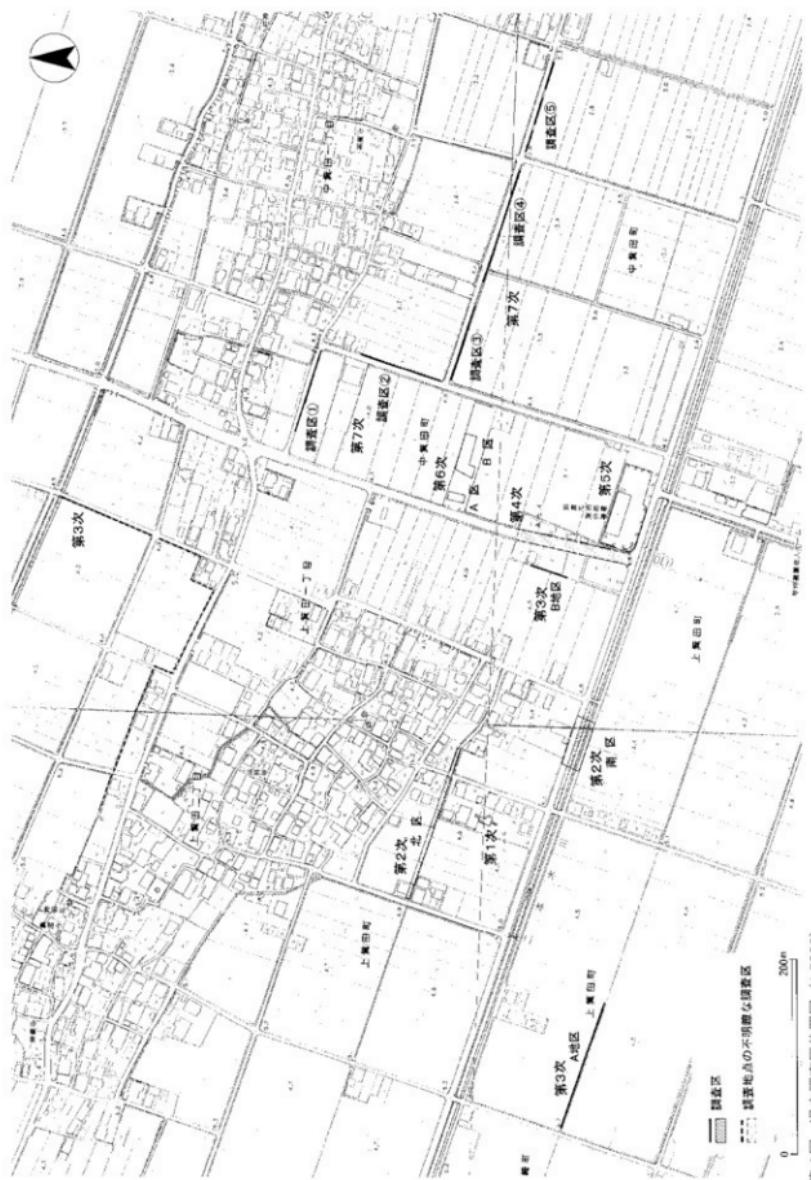
に出土している。

第2次調査⁽²⁾は、県営圃場整備に伴い上箕田遺跡調査会によって実施された。調査区は南区・北区の2地区に分かれており、このうちの南区では弥生時代の方形周溝墓や古代の掘立柱建物などが確認された。掘立柱建物柱穴からは縄釉陶器・灰釉陶器・布目瓦が出土している。また北区では、弥生時代前期～後期の溝や土坑などが確認されている。遺物は弥生時代前期から後期の土器・銅鐸形土製品・石鎚・石斧・編物製品などが出土している。特に、石

調査次数	绳文	弥生前期	弥生中期	弥生後期	古墳	古代	中世	近世	備考	文献
	突帯文	前半	後半	前葉	中葉	後葉	山中	久山		
第1次 (1960年度)	大洞？	△	△	△	SK?				若蔵穴	三重県立神戸高等学校郷土研究クラブ 1961「上箕田 弥生式遺跡第一次調査報告」
第2次 (1968年度)	北区	○		○	○	△	○		粘土塊・銅鐸形土製品・鐵・石器剥片類	鈴鹿市教育委員会・上箕田遺跡調査会 1970「上箕田 弥生式遺跡第二次調査報告」
		?	△		?	?	○	○縁・灰	△	三重県教育委員会1971「昭和45年度県営圃場整備事業地内上箕田遺跡調査概要」
第3次 (1970年度)		△	○	△	△	△	△		ミカン削材？・織末製品	鈴鹿市遺跡調査会1985「市遺跡発掘調査実績改訂工事に伴う埋蔵文化財調査報告」
第4次 (1985年度)										鈴鹿市遺跡調査会1985「市遺跡発掘調査報告」
第5次 (1991年度)	△五貫森	-	-	○SX	-	-	-	△	○灰	鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会 1993「上箕田遺跡」
第6次 (1995年度)	-	-	-	-	-	-	-	○灰	○	鈴鹿市教育委員会1996「上箕田遺跡発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』
第7次 (2007年度)					△	△	△	○	○	

○：遺構あり △：遺物あり 緑：縄釉陶器 灰：灰釉陶器

第1表 上箕田遺跡調査次数一覧表



第4図　過去調査区位置図（1/5000）

器の剥片が多く出土している点や樹皮に巻かれた粘土塊が出土している点からは、近隣で石器や土器が生産されていた可能性が考えられる。

第3次調査⁽³⁾は、県営圃場整備に伴い三重県教育委員会によって実施された。詳細は後述する。

第4次調査⁽⁴⁾は、市道鈴鹿楠線の建設に伴い鈴鹿市遺跡調査会によって実施された。弥生・平安・鎌倉時代の遺物の出土が報じられている。なお第3次調査の試掘に引き続き、上箕田城跡に隣接する地点での調査であるが、関連する遺構・遺物は確認されていない。

第5次調査⁽⁵⁾は、消防署建設に伴い鈴鹿市遺跡調査会によって実施された。弥生時代中期前葉の土器の出土した方形周溝墓や古代の掘立柱建物などが検出された。古代の掘立柱建物や中世前期の溝は表層条里と方向が共通する。また、無遺物層を挟んで、縄文時代晩期後半の五貫森式の突帯土器が出土している。

第6次調査⁽⁶⁾は、箕田地区市民センター建設に伴い鈴鹿市教育委員会によって実施された。古代～中世にかけての溝や井戸が確認されている。溝は、表層条里と方向が共通するものがある。遺物は古代の土師器壺や中世前期の山茶碗などが出土している。また、下層調査で確認された炭化物や有機物を含む暗灰色粘質土層は第5次調査で確認された縄文時代晩期後半の土器が出土したVI層に対応すると考えられている。

さて今回の第7次調査は、遺跡の東部地点に位置する。今回の調査区の位置づけをなすためには、遺跡の全体の平面的な展開状況を把握する必要がある。遺跡の展開状況を把握する上では、東西南北に細長い調査区が設定された第3次調査が参考になることから、第3次調査については詳細にみていくことにする。

②第3次調査の概要

1970年に行われた第3次調査は、現在の上箕田集落の北部・東部・南部の3カ所に試掘トレーンチが設定され、このうち南部（A地区）と東部（B地区）の一部において本調査が行われた（第4図）。

東部の調査区は、上箕田城跡の西部で実施された。

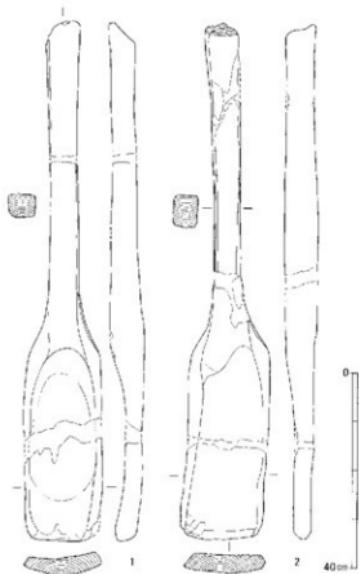
中世前期の山茶碗が出土したにすぎず、上箕田城跡に関連する遺構・遺物は確認されていない。

A地区は、第2次調査南区から120mほど西の地点に位置する。1×140mの調査区に1×2m単位の小地区が設定され、西から東へと3～70番までの番号が与えられた。

概報⁽⁷⁾によると、調査区の制約上遺構の性格は判然としないものの各所において地山の落ち込みが見られたとされ、16区では溝状遺構、22～23区では土坑と考えられた遺構が確認されている。遺物量は50箱分の出土があったとされており、遺構・遺物の分布密度の高さが窺われる。

また62区では、一本鋤2本が横位の状態で検出されており、土坑が存在したと考えられている。

第5図1・2は一本鋤の未製品であり、半裁材を削りだして整形している段階のものである。1の全長は約107cm、刃部は幅16cm、長さ50cm、厚さ4cm、柄は幅5.5cm、長さ57cm、厚さ4.5cmである。2の全長は約106cm、刃部は幅17cm、長さ49cm、厚さ4cm、



第5図 第3次調査出土木製鋤未製品実測図（1:10）



第6図 第3次調査出土木製錫未製品出土状況

柄は幅5cm、長さ57cm、厚さ6.5cmである。いずれも樹種は、肉眼観察の結果、広葉樹と推定される。

③小結

以上をまとめると、次のようになる。

① 遺物量からみると、圧倒的に弥生土器が多く、時期的には弥生時代を中心とする遺跡といえる。

なかでも、弥生時代の遺物は第1次調査区・第2次調査北区・第3次調査A地区で多量に出土しており、遺跡西部の調査区からの出土量が多い。これらの調査区では、石器の剥片や粘土塊や未製の木製品が出土していることから、手工業生産も行っていた集落域の可能性が考えられる。一方、東部の調査区では遺構は存在するが、相対的には遺物量は少ない。方形周溝墓がみつかっており、墓域が展開している可能性が考えられる。

② 繩文時代晩期後半の遺物がまとまって確認されているのは第5次調査に限定される。また、縩文時代晩期の層は、弥生時代前期以降の層とは間層を挟んで存在する。

③ 弥生時代から中世までの遺構が確認されている地点では、ほぼ同一遺構面で検出されているが、当該地点はいずれも遺物包含層が薄く遺物出土量の少ない地点での所見である。一方、遺物包含層の厚い地点では弥生時代の遺構しか確認されていない。

④ 古代の遺構は、第2次調査南区・第5次調査区で掘立柱建物が確認されている。特に、第2次調査南区では縄釉陶器・灰釉陶器・布目瓦が出土していることから、周辺地域における中心的な地点である可能性がある。

⑤ 中世の遺構は、東部の調査区で掘立柱建物が確認されているが、上箕田城跡に連携する遺構は未確認である。

註

- (1) 三重県立神戸高等学校郷土研究クラブ1961『上箕田
弥生式遺跡第一次調査報告』
- (2) 鈴鹿市教育委員会・上箕田遺跡調査会1970『上箕田
弥生式遺跡第二次調査報告』鈴鹿市文化財調査報告
第2冊
- (3) 三重県教育委員会1971『昭和45年度県営圃場整備事
業地内上箕田遺跡調査概要』
- (4) 鈴鹿市遺跡調査会1985『市道鈴鹿植継改良工事に伴
う埋蔵文化財調査報告』
- (5) 鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会1993『上箕田
遺跡』鈴鹿市埋蔵文化財調査報告12
- (6) 鈴鹿市教育委員会1996『上箕田遺跡発掘調査報告』
『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』
- (7) 三重県教育委員会1971

第Ⅲ章 基本層序

第1節 旧地形の把握と地層観察の方法

第7次調査の範囲確認調査や工事立会調査を含めた調査範囲の全長は東西約840mに達しており、本調査区としての全長も約451.5mに及ぶ長いトレチを断続的に開けることになった。

今回の調査区は、現在の海岸線から約0.8～1.6kmの沖積低地に位置する。沖積低地においては層相の色調や粒径が側面変化することが一般的であり、同一の地層であっても地点によって全く異なる様相を呈する同時異相の現象がみられることも多い。そして実際の上箕田遺跡の既往の調査では、各地点で多様な地層が観察してきた。

したがって、個々の狭い調査区の地層を観察するだけでは遺跡全体の基本層序や遺構面を把握することすら困難になる可能性があった。

そのために、今回の調査では粒径と堆積構造に着目して堆積環境で分層する堆積学的な視点および地層の堆積後の変化に着目した土壤学的な視点からの分層を行った⁽¹⁾。

まず、堆積学的な視点としては、粒度組成はウェントワース・ベティジョン法に、色調は標準土色帖に基づいている。また、地層の空間的な広がりを把握するため同時に同時異相の概念を意識し、層相の側面変化の把握に努めた。

土壤学的な視点としては、堆積後に土壤化の及んだ土壤化層（a層）と土壤化の及ばなかった非土壤化層（b層）の把握に努め、第7図に示した。また、土壤化層であるa層が人為的な耕作土などの地層の可能性があるか否かにも注意を払った。

また、旧地形を把握するために事前に空中写真的判読を行い、地層観察の参考にした。この点については、地形環境の復原として第VI章第1節に掲載しているので、参照されたい。

なお、今回の調査では環境復原を目的とした年代測定や微化石分析を実施していない。調査当初には下層調査での環境復原を検討していたが、遺構や遺物の出土がみられず試料に恵まれなかつたことから、断念した。

註

- （1）外山秀一1995「池島・福万寺遺跡の理知と環境I—遺跡の立地と環境の復原—I」「池島・福万寺遺跡発掘調査概要XII」（財）大阪文化財センター

第2節 調査区の基本層序

各調査区での所見は第7図に示した。

調査区の現況は道路および水路であったために、これらの敷設に伴う造成によってすでに削平を受けている。

1層 現道および水路敷設に伴う造成土であり、全調査区で確認した。

2層 造成土である1層によって削平を受けていた調査区②以外の全調査区を通じて確認した。土質は灰色細繊混じり極細砂質シルト～粘質シルトで、調査区①での粒径が若干粗い。搅拌を受けている人為層であり、摩滅した近世陶磁器類が出土している。

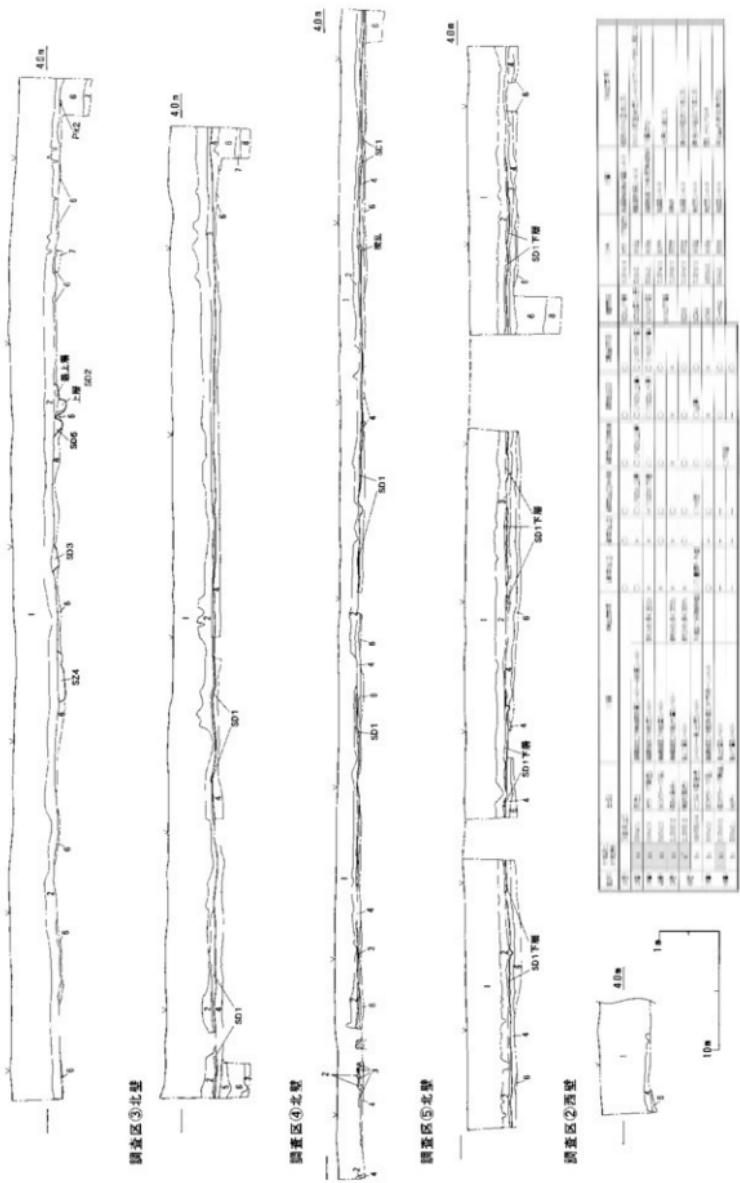
2層下面では、溝SD1上層を確認している。

3層 調査区③～⑤にかけて確認した。土質はオリ

ーブ黄色細繊混じり粘質シルトで、搅拌を受けている人為層である。4層に由来すると思われる土が搅拌としてブロック状に混じっていることから、4層の上部を削平していると考えられる。3層上面では、溝SD1下層を確認している。

4層 調査区①以外の全調査区で確認した。土質は灰オリーブ色細繊混じり粘質シルトで、土壤化層である。摩滅した灰釉陶器や陶器碗（山茶碗）が出土していることから、機能していた時期は中世前期に相当すると考えられる。

5層 調査区③の西部でのみ確認された。土質は暗灰黄色細繊混じり粘土質シルトである。6層を削平している。遺物は出土していないが、搅拌されてい



第7圖 調查區主層斷面圖 (比例尺1:80、攝影1:400)

る人為層である。

6層 全調査区で確認した。非土壤化部分の土質はにぶい黄橙色シルト～粘土質シルトで、調査区①では若干粗い。堆積方向は西から東で、弱いラミナを確認した。層の下方では、部分的に腐食した有機物層が互層に混じる地点もある。また、調査区③～⑤では上部が土壤化しているが、直上層である4層や5層から土壤化が連続していることから、土壤化は当層上面から及んだものではなく直上層から浸透したと判断した。土壤化部分の土質は暗灰黄色粘土質シルトである。

当層より下層は無遺物層であり、人為層は認められなかった。なお、2層直下に6層が観察された調査区①では6層上部で各遺構が検出されたが、調査区①の6層上部は非土壤化層であることから各遺構は更に上部から掘りこまれたと考えられる。

7層 調査区①・③および工事立会調査で確認した。土質は調査区①で灰オリーブ色細礫混じり粗砂混じり中砂、調査区③で灰オリーブ色シルトと変化に富む。堆積方向は西から東で、ラミナを確認した。なお工事立会調査での粒径も、細礫混じり粗砂混じり中砂である。明瞭にラミナが観察され、円度が低かったことから、河成堆積層と考えられる。また、わずかに中礫の含まれている部分もあった。

8層 調査区③～⑤で確認した。粒径は粘土質シルト。調査区③では土壤化層と非土壤化層が互層に堆積しており、土壤化層には腐食した有機物が層状に多く含まれていた。調査区⑤では層の上部が土壤化しており、分解しきれていない植物遺体が含まれていた。この点については、地下水位が高いために残存していたと考えられる。

第IV章 調査区の概要と遺構

第1節 調査区の概要

上箕田遺跡第7次調査では、第I章第1節で述べたように、大きく5つの調査区に分けて調査を行っている。これらの調査区は、いずれも現道の脇の配管を埋設する位置に設けている。まず、これらの調査区の規模や掘削状況などの概要について述べておきたい。

また、本調査後に行った工事立会調査においても一部で遺構が検出されているため、この部分についても本節で概要を述べておきたい。

①本調査

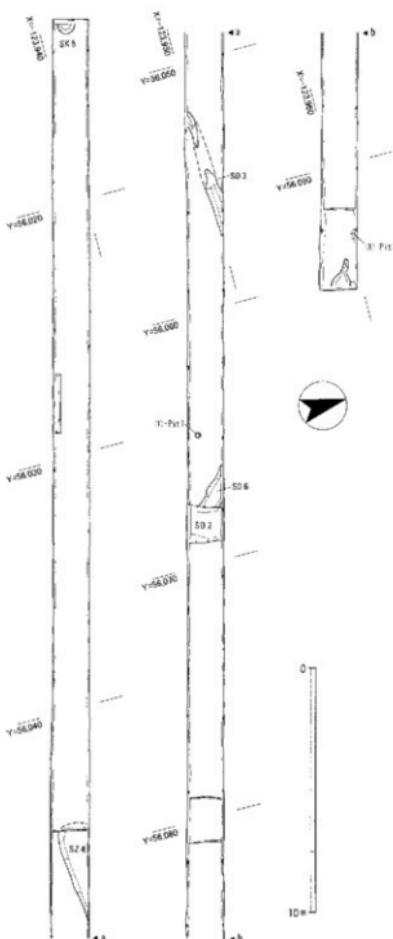
調査区①(第8図) 調査区①は、本調査の調査区のうち最も北側に設けたもので、長さ85m、幅1.5mの東西方向にのびる調査区である。

この調査区では先行して調査を行った調査区②～⑤とは異なり、4層に相当する層が確認できないなど土層の堆積状況がやや異なっていたため、改めて土層の堆積状況や遺物の出土状況を確認した上で、地表下0.7mほどで検出した6層の上面を主たる検出面として掘削を行った⁽¹⁾。調査区の東端のみは地表下1.3mまで掘削を行い、下層の遺構の有無の確認および、土層の堆積状況に関する情報の収集を行った。

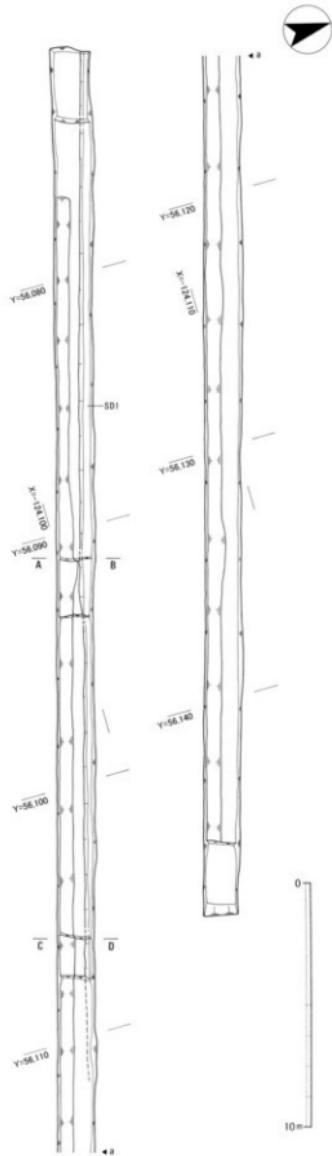
この調査区では、土坑や溝、落ち込み、ピットなどの古代～中世の遺構を複数検出した。遺構密度は高くなく、調査区全体にわたって散在的に検出されている。また、遺構埋土中や包含層中などから、弥生土器・須恵器・土師器・灰釉陶器・山茶碗・陶器・磁器・銅錢など、弥生時代～近世にかけての遺物が出土した。

調査区② 調査区②は、南北方向にのびる調査区で、長さ88m、幅1.5mである。調査区となった部分には既設の側溝が存在していたため、これを除去した後に調査を行った。

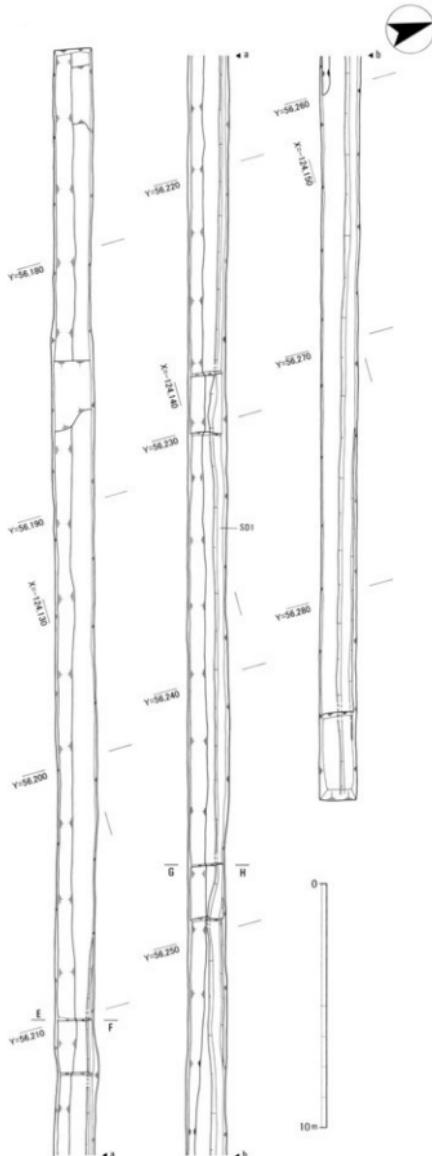
調査区③に近い南端から掘削を開始し、調査区③同様に6層上面を検出面として掘削を進めていった



第8図 調査区①平面図 (1:200)



第9図 調査区③平面図 (1:200)



第10図 調査区④平面図 (1:200)

が、調査区南端から5mほどまでしか検出面が遺存しておらず、それより北側はすべて側溝設置時の工事による擾乱を受けていた。

調査区②では、こうした擾乱などのため、遺構は全く確認できなかった。しかしながら、擾乱土中からは須恵器・土師器・山茶碗・陶器・磁器や、石庭丁未製品と思われる石製品や砥石など、多くの遺物が出土している。これらの遺物は2層や4層に近い土質の擾乱土中に含まれておらず、元々は調査区②付近の包含層中に含まれていた遺物であると推定される。

調査区③（第9図） 調査区③は、東西方向にのびる調査区で、長さ80m、幅1.5mである。調査区となった部分には既設の側溝が存在し、この側溝を除去した後に調査を行った。この既設側溝のため、調査区南半は擾乱を被っている。

本調査ではこの調査区から調査を開始したため、まず土層の堆積状況や遺物の出土状況を確認した上で、地表下0.8mほどで検出した6層の上面を検出面として掘削を進めていった。調査区東端と西端について、地表下1.3mほどまで掘削を行い、下層の遺構の有無の確認および、土層の堆積状況に関する情報の収集を行った。

この調査区では、検出面とした6層上面では遺構の存在は確認できなかったが、より上層の3・4層上面で、範囲確認調査でも確認されていた細い溝を検出した。この溝については、層位や出土遺物などから、近世の溝であると判断された。また、包含層中や造成土中からは弥生土器・土師器・山茶碗・陶器・磁器など、弥生時代～近世にかけての遺物が出土した。

調査区④（第10図） 調査区④は、東西方向にのびる調査区で、調査区③の東側に位置する。長さ120m、幅1.5mである。調査区となった部分には既設の側溝が存在し、この側溝を除去した後に調査を行った。この既設側溝のため、調査区南半は擾乱を被っている。

調査区④でも、調査区③と同じく、6層上面を検出面として掘削を進めていた。調査区の東端のみは地表下1.1mほどまで掘削を行い、下層の遺構の有無の確認および、土層の堆積状況に関する情報の

収集を行った。

この調査区においても6層上面では遺構は全く検出されなかつたものの、より上層で調査区③で検出された近世の溝の続きと思われるものが検出され、この溝が現道に沿って東へとびていることが確認された。また、包含層中や造成土中からは弥生土器・須恵器・土師器・灰釉陶器・土錘・山茶碗・陶器・磁器など、弥生時代～近世にかけての遺物が出土した。

調査区⑤（第11図） 調査区⑤は、東西方向にのびる調査区で、調査区④の東側に位置する。途中、電柱が存在するために一部を掘り残しており、そのために3つの区画に分断されている。長さは計78.5m、幅は1.5mである。また、調査区となった部分には既設の側溝が存在したため、これを除去した後に調査を行った。調査区③・④にくらべ、設置されていた側溝が浅いものであったため、この側溝による検出面への影響はなかった。

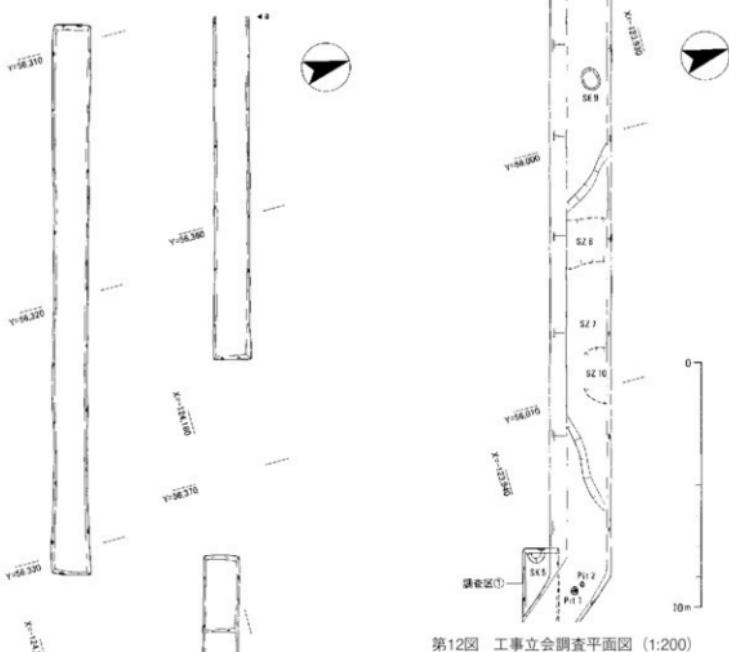
調査区⑤でも、調査区③・④と同じく、6層上面を検出面として掘削を進めていた。調査区のうち、最も東側の区画の西端では地表下1.5mまで掘削を行い、下層の遺構の有無の確認および、土層の堆積状況に関する情報の収集を行った。

この調査区でも6層上面では遺構は検出されなかつたものの、より上層で調査区③・④で検出された近世の溝の続きが検出され、この溝が現道に沿ってさらに東へとびていることが確認された。また、包含層中や造成土中からは弥生土器・須恵器・土師器・灰釉陶器・山茶碗・陶器・土錘など、弥生時代～近世にかけての遺物が出土した。

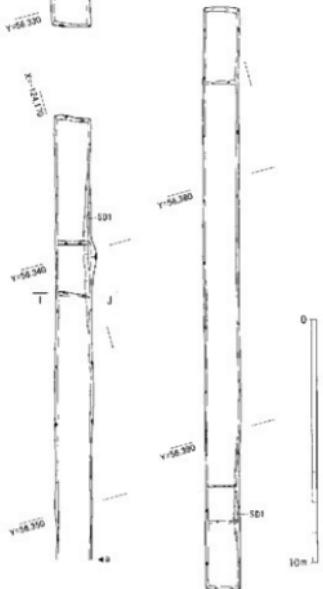
②工事立会調査

工事立会調査を行った範囲は、第1図に示した通りである。工事立会調査は、配管を埋設する工事に伴って行ったものであり、幅1.5～2mの溝状に掘削を行っている。工事立会調査を行った面積は全体でおよそ680m²程度であるが、そのほとんどの部分では擾乱が激しかったこともあって、遺構・遺物とともに確認できなかつた。

しかしながら、調査区①の西側隣接地においては、自然流路もしくは落ち込みや戸井、ピットなどの中



第12図 工事立会調査平面図 (1:200)



第11図 調査区⑤平面図 (1:200)

世に属すると考えられる遺構が複数検出された（第12図）。

遺構が検出された範囲の基本的な土層の堆積状況は調査区①とほとんど変わらず、落ち込みやピットなどの遺構は、近世包含層である2層の直下に存在する6層の上面で検出された。ただし、井戸の存在する部分付近では、2層と6層との間に厚さ10~20cmほどの砂層が認められた。井戸はこの砂層の上面で検出されている。この砂層の中には遺物の包含は確認できなかった。また、工事に伴って地表下2mほどの深さまで掘削を行っており、6層の下に調査区①で確認された7層に相当すると考えられる厚い砂層が堆積していることを確認した。

遺構埋土中や包含層中からは、弥生時代～中世にかけての遺物が多数出土している。

註

(1) 各調査区の土層については第Ⅲ章で述べている。

第2節 遺構

次に、各調査区で検出された遺構について個別に述べていきたい。本調査によって検出された遺構は溝が3条、土坑が1基、落ち込みが1基、ピットが2基である。そのうちの多くが調査区①において検出されたものである。また、本調査後に行われた工事立会調査によてもいくつかの遺構が検出された。それについても本節で述べたい。

①本調査で検出された遺構

S D 1 (第13図)

調査区③・④・⑤で確認した、現道に沿って東西方向に長くのびる溝である。調査区③の西端と調査区⑤の東端で存在が確認されていることから、長さは350m以上あるものと考えられる。大半の部分で北側の立ち上がりが調査区外へ出ており、幅については情報が少ないが、確認できた範囲ではおよそ40cm程度の幅を持ち、深さは10~20cm程度である。

この溝は近世包含層の直下で検出されている。また、埋土はほぼ單一層で、直上に堆積する近世包含層である2層⁽¹⁾と同一の土で埋まっている。部分的に下層に別の埋土が確認できる部分もある。

出土遺物としては土師器・陶器・磁器・鉄釘などがある。遺物の多くは細片で、図化できたものは中世の土師器1点にすぎない。陶器・磁器はいずれも近世のもので、鉄釘も近世のものである可能性が高い。これらの出土遺物や検出層位、埋土などからみて、SD 1は近世の遺構と考えられる。2層に包含

されていた遺物からみて、19世紀前半には埋没していた可能性が高い。

S D 2 (第14図)

調査区①で検出した溝である。調査区とは直交して南北にのびており、幅1.5m、深さ20cmである。埋土の状況などからみて、水が流れていたものと考えられる。埋土からは土器片が多く出土しているが、いずれも細片でローリングを受けており、この点からも流水があったことが推定される。

出土遺物としては土師器・須恵器・灰釉陶器などがある。中世以降の遺物は含んでおらず、平安時代の遺構である可能性が高い。

S D 3 (第14図)

調査区①で検出した東西方向にのびる幅50cmほど の溝である。埋土はほぼ單一層である。出土遺物はなかったものの、埋土は直上に堆積している近世包含層とは全く異なる質であるなどSD 1の様相とは異なっており、むしろ後述のSD 6などとの共通性が窺われる。したがって、この溝も古代~中世の遺構である可能性が高い。

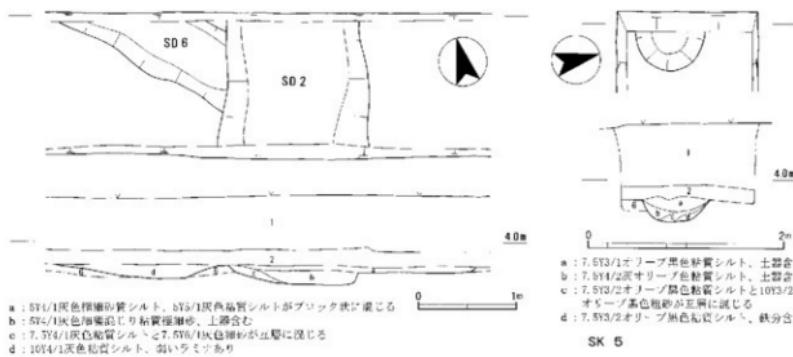
S Z 4 (第14図)

調査区①で検出した深さ10cm程度の浅い落ち込み状の遺構である。北側は調査区外へとのびている。

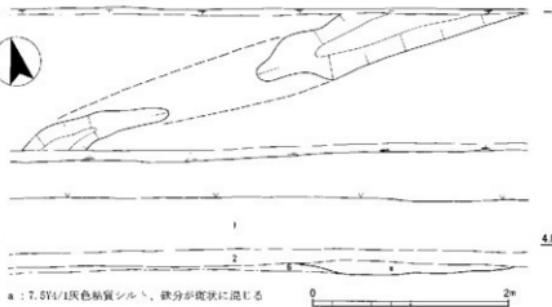
出土遺物としては弥生土器・須恵器・土師器がある。この遺構からは、弥生土器の高杯や須恵器の壺、土師器の甕などの比較的大きな破片が出土している一方で、細片化した遺物の出土量は少なく、他の遺



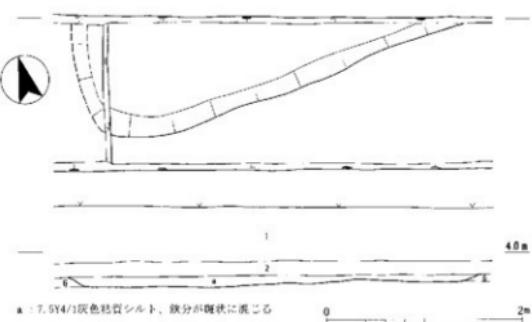
第13図 SD 1 土層断面図 (1:40)



SD 2-6



SD 3



SZ 4

後土層断面図中に数字で示した層の土色については第7図に詳説する。

第14図 SD 2・3・6、SK 5、SZ 4平面図・土層断面図 (1:50)

構に比べてやや遺物の出土状況が異なるようである。中世以降の遺物は出土しておらず、出土した土師器窯の形態などからみて、奈良時代の遺構である可能性が高い。

S K 5 (第14図)

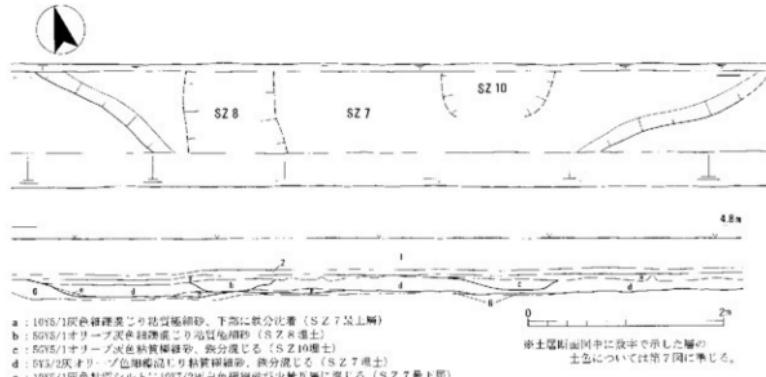
調査区①の西端で検出した小型の土坑である。半分以上が調査区外へ出ており、全形は不明であるが、円形ないしは梢円形の土坑であると思われる。幅70cm、深さは25cmである。埋土の一部には流水作用によって流入したと思われる層（c層）もあり、埋没過程において付近に流水による堆積作用があったことが窺われる。

出土遺物としては、弥生土器と思われるものや土師器、山茶碗などがある。また、志摩式製塙土器と考えられるものもある。ただしいずれも小片で、図化できるものはなかった。これらの出土遺物からみて、鎌倉時代の遺構であると思われる。

S D 6 (第14図)

調査区①で検出した東西方向にのびる溝である。S D 2 に切られている。幅80cm、深さは15cm程度である。

出土遺物としては弥生土器と思われるものや土師器がある。いずれも小片で、図化できるものはなかった。これらの出土遺物や S D 2 との先後関係などからみて、奈良時代～平安時代の遺構であると思われる。



第15図 S D 6, S Z 7, S Z 8 平面図・土層断面図(1:50)

①-Pit 1

調査区①の S D 2・6 の西側で検出したピットである。近世包含層の直下で検出した。径20cm、深さ10cmで柱痕は確認できなかった。

埋土からは土師器や山茶碗が出土している。土師器には羽釜と思われる破片がある。こうした遺物からみて、鎌倉時代～室町時代の遺構であると考えられる。

①-Pit 2

調査区①の壁面で断面のみを確認したピット状の遺構である。深さは5cm程度と浅い。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

(2)工事立会調査で検出された遺構

S Z 7 (第15図)

調査区①の西端より7mほど西で検出された深さ20cmほどの落ち込みである。埋土には明瞭なラミナが認められ、また出土した遺物にもローリングを受けたものが多く見られることなどから、流水があつたことが推定でき、自然流路の一部を検出した可能性が高い。

出土遺物としては、須恵器や土師器、山茶碗、陶器など、古代から中世にかけてのものがある。これらの遺物からみて、室町時代頃には埋没したものと考えられる。また、東側肩部付近のa層中からウマの歯が検出されている。

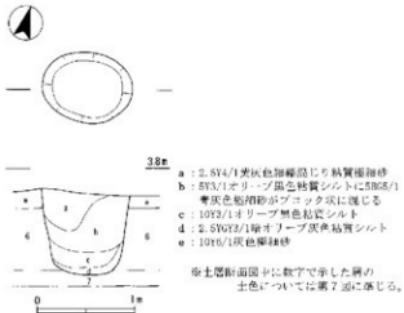
S Z 8 (第15図)

S Z 7 の西端付近で S Z 7 と重複して確認された落ち込みである。平面ではその形状を明瞭に検出できなかったものの、調査区壁面では深さ15cmほどの落ち込みであることが確認できた。調査区の南北両壁面で断面を確認しており、不明瞭ながら細長い溝状の遺構であるとみられる。S Z 7 と同じく埋土にはラミナが認められることから、S Z 7 の埋没過程でその上部に形成された自然流路であったものと考えられる。

平面形が明確にできなかったため、確定に S Z 8 内部から出土したと断定できる遺物はないが、青磁碗（第20図47）は出土位置からみてこの遺構に伴うものである可能性がある。S Z 7 の最上層に堆積している a 層によって覆われており、室町時代には埋没したものと考えられる。

S E 9 (第16図)

S Z 7 の西側で検出した井戸である。2層直下に堆積していた砂層の上面で検出された。長径95cm、短径70cmの平面形が梢円形を呈する井戸である。井戸枠やその痕跡は確認できず、素掘りの井戸であると思われる。現状での深さは90cmほどで、底面は砂



第16図 S E 9平面図・土層断面図 (1:50)

層である7層に達しており、掘削時にはかなりの湧水があった。

出土遺物としては、土師器・灰釉陶器・山茶碗などがある。山茶碗からみて、鎌倉時代の遺構であると考えられる。

S Z 10 (第15図)

S Z 7 の東端付近で S Z 7 と重複して確認された落ち込みである。やはり平面では明瞭に検出できず、調査区北側壁面でその断面を確認した。深さは14cmほどである。調査区南側壁面ではこの遺構に相当すると考えられる落ち込みは確認できなかった。

平面で明確に検出できなかったため、S Z 10 から出土したと断定できる遺物はないが、S Z 8 と同じく S Z 7 最上層に堆積している a 層によって覆われていることから、室町時代には埋没したものと考えられる。

Pit 1

調査区①東端に近い場所で検出されたピットである。径30cmほどで、埋土中には不明瞭ながら柱痕が認められた。埋土には細かい炭化物が含まれていた。また、埋土内から土師器の小片が出土している。調査区①で検出された遺構と同じく、古代～中世の遺構であると考えられる。

Pit 2

Pit 1 のすぐ北側で検出された小型のピットである。柱痕は確認できず、遺物の出土もなかった。しかししながら、埋土の色調や土質は Pit 1 とよく類似していることから、やはり古代～中世の遺構であると考えられる。

註

(1) 土層については第Ⅲ章を参照。

遺構名	種別	時期	調査区	長さ・長径 (m)	幅・短径 (m)	深さ (m)	出土遺物	備考
S D 1	溝	江戸時代	③～⑤	350～	0.4	0.1～0.2	土師器・山茶碗・陶器 ・磁器・鉄釘	
S D 2	溝	平安時代	①	1.5～	1.5	0.2	須恵器・灰釉陶器・土 師器	
S D 3	溝	奈良時代～室町時代	①	5.4～	0.5	0.15	—	S D 6などと埋土類似
S Z 4	落ち込み？	奈良時代	①	3.9～	1.5～	0.1	弥生土器・須恵器・土 師器	
S K 5	土坑	鎌倉時代	①	0.7	0.4～	0.25	山茶碗・土師器・製塙 土器	
S D 6	溝	奈良時代～平安時代	①	2.0～	0.8	0.15	土師器	S D 2に切られる
①-Pit 1	ピット	鎌倉時代～室町時代	①	0.2	0.2	0.1	山茶碗・土師器	
①-Pit 2	ピット	不明	①	0.4	—	0.05	—	壁面で確認
S Z 7	自然流路	鎌倉時代～室町時代	立会	1.0～	7.5	0.2	弥生土器・須恵器・ 灰釉陶器・土師器・ 山茶碗・陶器・青磁・ 馬齒	
S Z 8	自然流路	鎌倉時代～室町時代	立会	1.0～	0.9	0.15	—	S Z 7と重複
S E 9	井戸	鎌倉時代	立会	0.95	0.7	0.9	灰釉陶器・山茶碗	
S Z 10	落ち込み	鎌倉時代～室町時代	立会	0.5～	1.1	0.14	—	S Z 7と重複
Pit 1	ピット	奈良時代～室町時代	立会	0.3	0.28	0.14	土師器	柱痕あり
Pit 2	ピット	奈良時代～室町時代	立会	0.2	0.15	0.2	—	Pit 1と埋土類似

第2表 遺構一覧表

第V章 遺物

第1節 本調査の出土遺物

遺物は包含層中などから多数出土している。ただし細片が多く、図化できたものは少数である。以下、遺構出土遺物と遺構外出土遺物（包含層・擾乱土中出土遺物）とに分けて述べていきたい。

① 遺構出土遺物（第17図）

S D 1 出土遺物（1） 1は土師器の鍋の口縁部である。調査区③の S D 1 墓土中から出土した。小片であり、口径は復元できなかった。口縁端部は内側に折り返している。南伊勢系土師器と呼ばれる一群の土師器に属するものであり、室町時代の14世紀後半～15世紀前半頃のものと考えられる⁽¹⁾。

S D 2 出土遺物（2・3） 2は土師器の皿の口縁部である。小片であり、口径は復元できなかった。口縁端部は丸く収められる。口縁端部の形態や、それほど器高が高くないと思われることなどから、おそらく平安時代のものと思われる。

3は灰釉陶器の碗である。高台付近の破片であり、内面には施釉は認められない。高台の断面形はやや三日月形に近い形を示しており、おそらく平安時代の10世紀前半頃のものと考えられる⁽²⁾。

S Z 4 出土遺物（4～6） 4は弥生土器の高環の脚部である。環部と脚部を欠損しており、全体の形態は不明である。また、二次的に被熱しているこ

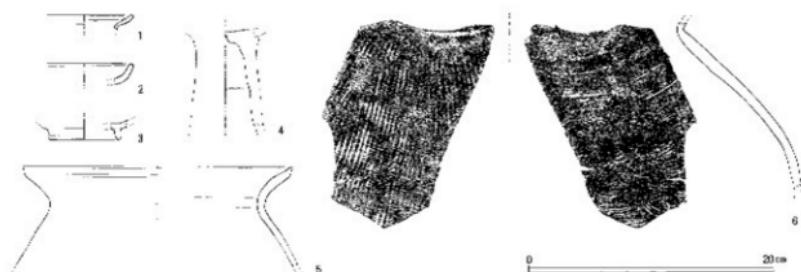
ともあって器壁の遺存状況が悪く、調整や文様の有無なども不明である。ただし、太くあまり外方へ開かない脚部の形態や、脚部と环部の接合方法、脚部内面頂部の刺突痕の存在などからみて、おそらく弥生時代後期中頃のものであると考えられる。

5は土師器の壺である。口縁端部はやや外方につまりあげられる。体部外面には細かなタテハケが認められる。それに対して、体部内面にはやや粗いタテハケが施されている。口縁部形態などからみて奈良時代のものと考えられる。

6は須恵器の壺または広口壺の頭部である。おそらく胴部最大径が60cm前後の大きさのものであったと推定される。外面には擬格子状のタカギが認められ、最終的にカキメで器壁を整えている。内面には同心円状の当て具痕が認められるが、部分的にナデによって磨り消されている。器形・調整などからみて、奈良時代のものと考えられる。

② 遺構外出土遺物（第18・19図）

遺構外出土遺物としては、各調査区の包含層や造成土・擾乱土の中から各種の遺物が出土している。大きく土器・陶磁器・土製品・石製品・金属製品に分けて詳述したい。なお、各遺物が出土した調査区については遺物一覧表において示している。



第17図 遺構出土遺物実測図（1:4）

土器・陶磁器（第18図7～26）

弥生土器（7・8） 7は広口壺の口縁部である。口縁端部は面をなし、粗い波状文が施されている。弥生時代後期のものである可能性が高い。8は器台の脚端部である。全体に太い凹線がめぐらされている。復元すると、かなり大型の器台になるものと思われる。器形や文様からみて弥生時代中期後葉のものと思われる。

須恵器（9） 9は环身の口縁部片であると考えられる。小片のため、口径の復元には不安を残す。たちあがりは短く、やや内湾している。口縁端部には不明瞭な面が認められる。飛鳥時代のものである可能性が高い。

灰釉陶器（10～13） 10～12は碗、13は壺である。10は三日月形高台をもち、11の高台も三日月形高台に近い形態である。11の底部内部の周囲には釉薬が認められる。12の高台は断面三角形である。底部内部の周囲には釉薬が認められる。10・11は平安時代の10世紀前半頃、12は同じく11世紀後半頃のものと考えられる⁽³⁾。13は壺の体部片で、外面は回転ケズリによって整形される。また、外面の一部には釉薬が認められる。10・11と同様の時期のものである。

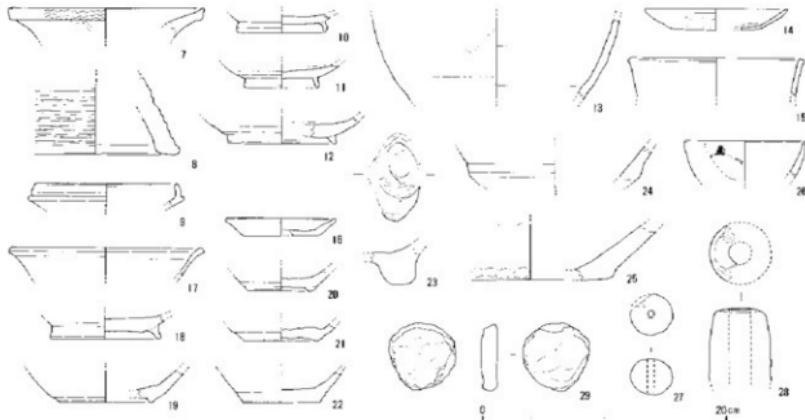
土器（14・15） 14は小皿である。器壁は薄く、口縁部は底部からやや屈曲して立ち上がる。内外面

にはユビオサエ痕が残る。15は茶釜の口縁部である。外面には不明瞭ながらタテハケが部分的に認められる。口縁端部には明瞭な面をもつ。いずれも中世の土師器である。

山茶碗（16～22） 16は小皿である。高台は付かない。17～22は碗である。17は口縁部片で、口縁端部は面をなす。18は底部外面に糸切り痕が残る。高台はやや高く、外方へ開く。高台端部には楞殻痕は認められない。19～21はいずれも低くつぶれた貼り付け高台をもち、高台端部には楞殻痕が認められる。22のみは高台が付けられておらず、底部外面には糸切り痕が認められる。

以上の山茶碗は、18以外はいずれも胎土の粗さや形態などから、瀬戸・猿投・知多などの製品である可能性が高い。高台形態や、底部と体部との間の屈曲が明瞭化していることなどから、鎌倉時代の13世紀後半頃のものが多いとみられる⁽⁴⁾。18については高台の特徴などから、平安時代の11世紀後半頃のものである可能性が高いであろう。

瓦質土器（23） 23は瓦質土器の脚部の破片であると考えられる。小片であり全体の器形は不明であるが、おそらく火鉢などの破片であると思われる。火鉢であるとすれば、中世のものである可能性が考えられる。



第18図 遺構外出土遺物実測図① (1:4)

陶器（24・25） 24は鉢などの底部付近の破片と考えられる。須恵質であり、釉薬は施されていない。25は練鉢である。常滑産のいわゆる「赤のもと」に似た焼成であり、外面はユビナデによって整形されている。江戸時代後期のものと思われる。

磁器（26） 26は染付の丸碗の口縁部であり、外面には染付による文様が認められる。江戸時代末期の19世紀前半頃のものであろうか。

土製品（第18図27～29）

土錘（27・28） 27・28は土錘である。27は球形の土玉状のものである。28は大型の土錘で、ほぼ半分を欠損するが、長さ8cm、径5cmほどの大きさであったと思われる。いずれも土師質の軟質な焼成で、胎土には砂粒が多く含まれており、中世以前のものである可能性が高い。このほかにも、もう1点土錘の破片が出土している。

加工円盤（29） 29は陶器の破片を打ち欠いて丸く加工した円盤状の製品である。元となった陶器は常滑産の壺と思われ、江戸時代のものと考えられる。

石製品（第19図30・31）

石庵丁未製品（30） 30は弥生時代の石庵丁の未製品の可能性が考えられる扁平な石器である。調査区②の擾乱土中から出土した。一部を欠損するが、

残存長6cm、幅4.8cm、厚さ0.8cmで、石材はホルンフェルスと思われる。周縁部は剥離によって刃部状に整形されている。研磨はなされていない。石庵丁の未製品としてはやや小型であるため、刃器としてそのまま使用されていたものかもしれない。

砥石（31） 31は砥石である。砂岩製であると考えられる。小型の立方体をなしており、1つの面に筋状の溝が認められる。擾乱土中からの出土であり、時期は不明である。

金属製品（第19図32）

銭貨（32） 32は江戸時代の寛永通宝である。調査区①の近世包含層中から出土した。銅質はあまり良好でなく、表面はかなり摩耗している。背は無文で、一文銭である。「寶」の字体などからみて、おそらく1668年以降に铸造された新寛永銭であると思われる⁽³⁾。

註

(1) 伊藤裕作1992「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター

(2) 猿投窯跡群における灰釉陶器編年では、O53号窯式期に属するものと思われる。なお、本稿では灰釉陶器の編年や曆年代観について以下の文献を参考にした。

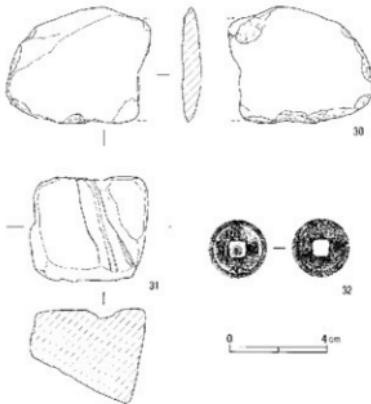
齊藤孝正1994「東海地方の施釉陶器生産」「古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3－」古代土器研究会、山下峰司1995「灰釉陶器・山茶椀」『概説中世の土器・陶磁器』 真陽社、尾野善祐2003「古代の尾張・美濃における緑釉陶器生産」「古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器－生産地の様相を中心にして－」古代土器研究会

(3) 10・11はK90号窯式期～O53号窯式期、12は百代寺窯式期に比定できる可能性が高い。

(4) ほとんどの個体が藤澤良祐による山茶碗編年の第6～8型式に属するものと考えられる。なお、山茶碗の編年や曆年代観・産地等については以下の文献を参考にした。

藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター

(5) 小川望2001「貨幣制度と銅錢・銭貨」『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房



第19図 遺構外出土遺物実測図② (1:2)

第2節 その他の出土遺物

本調査で出土した遺物以外にも、範囲確認調査や工事立会調査において多数の遺物が出土している。それらの遺物のうち、図化が可能であったものについてここで報告しておきたい。

工事立会調査においては調査区①の西側隣接地からいくつかの遺構が検出され、それらの遺構内から遺物が出土した。そこで、まずこれらの遺構から出土した遺物について述べ、その後に、工事立会調査において遺構外の包含層等から出土した遺物や、範囲確認調査によって包含層や造成土中から出土した遺物についてまとめて述べたい。

①遺構出土遺物（第20図）

S Z 7出土遺物（33~48）

弥生土器（33） 33は台付鉢の脚部の破片であると考えられる。脚端部には2条の沈線がめぐらされている。円形の透孔が開けられているが、小片であるために1箇所しか確認できなかった。本来は複数開けられていたものと思われる。弥生時代中期後葉のものであると考えられる。

土師器（34・39） 34は高环の脚部である。面取りがなされ、断面形は多角形をなす。頭部から外反していくことから、短い脚であったと想定できる。奈良時代の8世紀頃のものと考えられる。

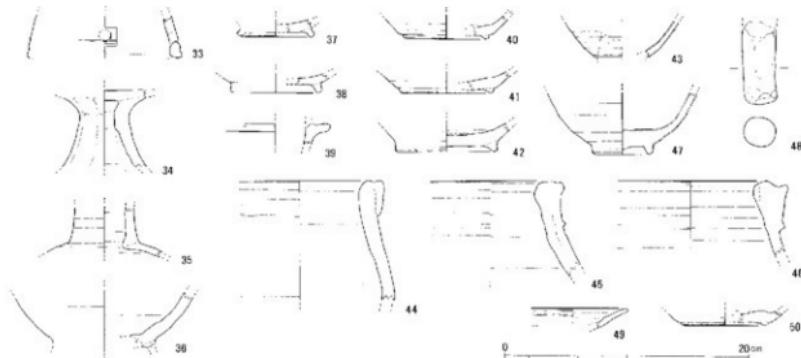
39は羽釜の鉢部である。口縁部は欠損しているが、やや内傾するものと推定される。室町時代～戦国時代のものと考えられる。

須恵器（35・36） 35は長頸壺の頭部である。頭部は細く縮まり、やや内傾することから、水瓶である可能性もある。奈良時代後期～平安時代前期の8世紀～9世紀前半頃のものと思われる。36は壺の底部である。外面にはヘラケズリが施される。高台が付くが、欠損している。

灰釉陶器（37・38） 37・38は灰釉陶器の碗と考えられるものである。いずれも小片の上、器壁の風化も進んでおり、釉は認められない。高台は断面方形を呈し、丁寧に貼り付けられている。高台端部に初期痕は認められない。38は底部外面に糸切り痕を残す。平安時代の10世紀頃のものと考えられる。

山茶碗（40～42） 40～42は山茶碗の底部片である。40・41は低く不整形な高台をもつが、42は断面三角形のややしっかりした高台を貼り付けている。41・42の高台端部には初期痕が認められる。40・41は形態や胎土などからみて瀬戸・窓投・知多などの製品である可能性が高い。いずれも鎌倉時代の13世紀中頃～後半頃のものと考えられる。

陶器（43～46） 43は天目茶碗である。内面及び外面の上部には黒褐色の鉄釉が施されている。器



第20図 工事立会調査遺構出土遺物実測図（1:4）

壁は薄く、体部はやや外方に開く。戦国時代の16世紀代のものである可能性がある。

44~46は常滑産の壺である。いずれも拡張された口縁端部が頭部と接着して縁帯となっている。44は15世紀後半に属する可能性があるが、45・46は口縁端部が内側に突出する傾向を見せており、戦国時代の16世紀前半のものと考えられる⁽²⁾。

磁器 (47) 47は青磁の碗である。釉薬は深い緑色を呈しており、内外面とも無文である。高台内面にも中央部を除いて釉が施されており、それによつて円筒形の窯道具の一部が融着している。また、破断面には黒色の付着物がみられる部分があり、破損後に補修を受けていた可能性もある。釉の施し方や、底部の厚さが高台の内外で同程度である点などから、戦国時代の15世紀後半~16世紀前半頃のものと考えられる⁽³⁾。なお、この青磁碗はS Z 8に伴う遺物である可能性もある。

土製品 (48) 48は断面円形の棒状の土製品である。焼成は土師質であり、一端を欠損している。土馬の脚とも考えられるが、やや長い。土師質容器の脚部とも考えられよう。

S E 9出土遺物 (49・50)

灰釉陶器 (49) 49は段皿である。内面には明瞭な段がつけられているが、外面には段は認められない。釉は口縁端部周辺のみに施されている。平安時

代の10世紀ごろのものと思われる⁽⁴⁾。

山茶碗 (50) 50は山茶碗の底部である。低くつぶれた高台を持ち、高台端部には初般痕が認められる。鎌倉時代の13世紀後半頃のものと思われる。

②遺構外出土遺物 (第21図)

前節と同じく、土器・陶磁器、土製品に分けて述べる。なお、各遺物が出土した箇所・調査坑については遺物一覧表(第3・4表)においても明示している。

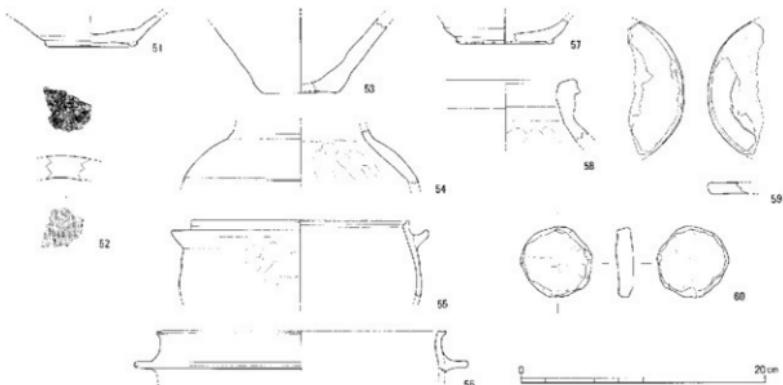
土器・陶磁器

弥生土器 (53) H18範囲確認調査坑No10の包含層から出土した。弥生時代中期の壺の底部と思われる。器壁の摩滅が著しく、調整などは不明である。

須恵器 (54) 54はH19範囲確認調査坑No5から出土した。壺の肩部と考えられる。外面には2条の沈線が認められる。

土師器 (55・56) 55はH19範囲確認調査坑No10の包含層から出土した。いずれも中世の土師器の羽釜である。55の口縁部は短くやや内傾しており、16世紀代のものと考えられる⁽⁵⁾。56は55に比べてやや口縁部が長く外反しているが、あまり内傾せず、やはり16世紀代のものである可能性が高い。

山茶碗 (51・57) 51は工事立会調査中にS E 9



第21図 工事立会・範囲確認調査遺構外出土遺物実測図 (1:4)

より5mほど西側で出土した。出土層位等は不明である。57はH19範囲確認調査坑No.5から出土した。いずれも低くつぶれた高台を持つ。57は高台端部に初期痕が認められる。鎌倉時代の13世紀後半のものと考えられる。

陶器 (58) 58はH19範囲確認調査坑No.5から出土した。常滑産の甕もしくは広口壺であると思われる。口縁部は肥厚し、口縁端部はやや外反する。おそらく、戦国時代の15世紀後半～16世紀頃のものと思われる。

土製品

瓦 (52) 52は平瓦の小片である。工事立会調査中に、S Z 7西側肩部付近の包含層中より出土した。凹面にはやや細かい布目が認められる。焼成状態は良好であるが土師質であり、煙化処理は行われていない。平安時代末～鎌倉時代にかけてのものと考えられる。

円盤状製品 (59) 59は瓦質の土製品である。H19範囲確認調査坑No.7から出土した。欠損しているが、もとは円盤状を呈していたものと考えられる。煙化処理が行われており、表面は黒くなっている。片側の面には焼成前に施されたと考えられる線刻が認められる。用途・時期ともに不明であるが、江戸時代以降のものと考えられる。

加工円盤 (60) 60は陶器の破片を打ち欠いて丸く加工した円盤状の製品である。H19範囲確認調査坑No.1から出土した。元となった陶器は常滑産の甕と思われる。江戸時代のものと考えられる。

註

(1) 長頸壺とすれば、猪投窯群における須恵器編年では、125～O10号窯式期にあたるものと考えられる。猪投窯群の須恵器編年や実年代観については以下の文献を参考にした。

橋崎彰一・斎藤孝正1983「猪投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』 愛知県教育委員会、東海土器研究会2000「須恵器生産の出現から消滅」

(2) 中野晴久1995「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』 小学館

(3) 青磁碗の編年については、以下の文献を参考にした。横田賢次郎・森田勉1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館、上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会、原廣志1999「横地氏閑連遺跡群と周辺遺跡の特徴について」『横地城跡－総合調査報告書－』 萩川町教育委員会

(4) O53号窯式期に属する可能性が高い。

(5) 伊藤裕作1999「中世後期の中北勢系土師器群に関する覚書」『研究紀要』第8号 三重県埋蔵文化財センター

図	No.	調査区	出土遺物	実測番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	残存率	備考
第17図	1	③	S D 1	001-01	土師器	瓶	—	—	—	~0.5mmの砂粒含む	—	口縁部小片
第17図	2	①	S D 2	001-03	土師器	瓶	—	—	—	~0.5mmの砂粒含む	—	
第17図	3	①	S D 2	001-02	灰釉陶器	碗	—	5.8	—		2/12	
第17図	4	①	S Z 4	001-04	弥生上器	高环	—	—	—	雲母含む	6/12	二次被熱
第17図	5	①	S Z 4	001-05	土師器	甕	22	—	—	~2.5mmの砂粒多く含む	2/12	
第17図	6	①	S Z 4	002-01	須志器	甕	—	—	—	~0.5mmの砂粒含む	—	
第18図	7	⑤	—	003-07	弥生土器	壺	16.0	—	—	~2mmの砂粒含む	1/12	口縁部に波状文
第18図	8	③	—	001-09	弥生土器	器台	—	—	—	~3mmの砂粒多く含む、5~9mmの砂粒含む	—	凹縁文
第18図	9	①	—	003-01	須志器	壺身	11.8	—	—		1/12	
第18図	10	③	—	002-02	灰釉陶器	瓶	—	7.0	—	~0.5mmの砂粒含む	2/12	
第18図	11	⑤	—	004-01	灰釉陶器	碗	—	6.2	—	~1.5mmの砂粒含む	2/12	
第18図	12	③	—	002-03	灰釉陶器	甕	—	—	—	~0.5mmの砂粒少量含む	2/12	
第18図	13	③	—	003-06	灰釉陶器	壺	—	—	—	~1mmの砂粒少量含む	—	
第18図	14	⑤	—	003-05	土師器	小瓶	11.6	—	1.7		2/12	
第18図	15	②	—	004-04	土師器	釜蓋	14.2	—	—	~2.5mmの砂粒含む	1/12	
第18図	16	②	—	001-07	山茶碗	小皿	9.0	6.0	1.4	~0.5mmの砂粒少量含む	2/12	
第18図	17	④	—	003-03	山茶碗	瓶	—	16.0	—		1/12	
第18図	18	④	—	003-02	山茶碗	瓶	—	—	9.0	~0.5mmの砂粒含む	2/12	糸切り痕
第18図	19	⑤	—	003-04	山茶碗	甕	—	—	8.0	~1mmの砂粒少含む	2/12	
第18図	20	⑦	—	004-02	山茶碗	瓶	—	5.8	—	~1.5mmの砂粒含む	6/12	
第18図	21	③	—	001-08	山茶碗	甕	—	6.0	—	~1mmの砂粒を少量含む	1/12	
第18図	22	③	—	001-06	山茶碗	甕	—	6.4	—		8/12	高台なし
第18図	23	②	—	005-01	瓦質上器	火鉢?	—	—	—	~1mmの砂粒含む	—	
第18図	24	②	—	001-03	陶器	鉢?	—	—	—	~3mmの砂粒含む	—	
第18図	25	⑤	—	003-08	陶器	鉢	—	—	—	~3mmの砂粒含む	—	當滑產か
第18図	26	②	—	004-06	磁器	大碗	10.0	—	—		2/12	染付
第20図	33	立食	S Z 7	007-08	弥生上器	台付盆	—	12.6	—	~2.5mmの砂粒含む	2/12	
第20図	34	立食	S Z 7	007-07	十脚器	高杯	—	—	—	~3mmの砂粒含む	8/12	脚部断面多角形
第20図	35	立食	S Z 7	007-04	須志器	水瓶	—	—	—	~1.5mmの砂粒含む	5/12	
第20図	36	立食	S Z 7	008-01	須志器	壺	—	—	—	~1mmの砂粒含む	3/12	
第20図	37	立食	S Z 7	008-03	灰釉陶器	瓶	—	6.3	—	~2mmの砂粒含む	2/12	
第20図	38	立食	S Z 7	008-02	灰釉陶器	甕	—	7.5	—	~3mmの砂粒含む	3/12	糸切り痕
第20図	39	立食	S Z 7	008-08	土師器	羽釜	—	—	—	~1mmの砂粒含む	—	
第20図	40	立食	S Z 7	008-09	山茶碗	甕	—	7.0	—	~1mmの砂粒含む	4/12	
第20図	41	立食	S Z 7	008-04	山茶碗	甕	—	7.6	—	~2mmの砂粒含む	3/12	
第20図	42	立食	S Z 7	008-05	山茶碗	瓶	—	8.4	—	~2mmの砂粒含む	6/12	
第20図	43	立食	S Z 7	007-03	陶器	天日井網	—	—	—	—	—	
第20図	44	立食	S Z 7	007-05	陶器	甕	—	—	—	~5mmの砂粒含む	—	當滑產
第20図	45	立食	S Z 7	008-07	陶器	甕	—	—	—	~4mmの砂粒含む	—	當滑產
第20図	46	立食	S Z 7	007-06	陶器	甕	—	—	—	~2mmの砂粒含む	—	當滑產
第20図	47	立食	S Z 7	008-06	青磁	甕	—	5.0	—		12/12	S Z 8 内出土の可能性あり
第20図	49	立食	S E 9	007-02	灰釉陶器	段皿	—	—	—	—	—	
第20図	50	立食	S E 9	007-01	山茶碗	瓶	—	7.0	—	~1mmの砂粒含む	3/12	
第21図	51	立食	—	008-11	山茶碗	甕	—	7.5	—	~2mmの砂粒含む	11/12	
第21図	53	H18範 No.10	—	005-04	弥生土器	壺	—	6.4	—	~2mmの砂粒含む	3/12	
第21図	54	H19範 No.5	—	006-03	須志器	壺	—	—	—	~1.5mmの砂粒含む	1/12	
第21図	55	H19範 No.5	—	006-02	土師器	羽釜	17.8	—	—	~2mmの砂粒含む	1/12	中北勢系
第21図	56	H18範 No.10	—	005-05	土師器	羽釜	22.6	—	—		1/12	中北勢系
第21図	57	H19範 No.5	—	006-04	山茶碗	甕	—	7.9	—	~1mmの砂粒少量含む	3/12	
第21図	58	H19範 No.5	—	006-01	陶器	甕	—	—	—	~1.5mmの砂粒含む	1/12	當滑產

第3表 土器・陶磁器一覧表

図	No	調査区	出土遺構	実測番号	種類	長径 (cm)	短径 (cm)	重量 (g)	胎土	残存度	備考
第18図	27	③	—	002-04	土錐	3.4	2.9	27.4	~0.5mmの砂粒と雲母含む	ほぼ 完存	土師質
第18図	28	⑤	—	003-09	土錐	—	5.0	82.0	~4mmの砂粒多く含む	—	土師質
第18図	29	②	—	004-05	加工円盤	5.5	5.4	49.1	~1.5mmの砂粒含む	完存	
第20図	48	立会	S Z 7	007-09	棒状土製品	2.7	2.5	—	~9mmの砂粒多く含む、 雲母・長石含む	—	土馬もしくは土器の脚?
第21図	52	立会	—	008-10	平瓦	—	—	—	~4mmの砂粒多く含む	—	土師質・布目
第21図	59	H19範確 No.7	—	006-05	円盤状製品	—	—	—		半欠	瓦質
第21図	60	H19範確 No.1	—	006-06	加工円盤	5.8	5.8	52.8	~2mmの砂粒多く含む	完存	

第4表 土製品一覧表

図	No	調査区	実測番号	種類	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	残存度	備考
第19図	30	②	005-03	石庖丁未製品?	5.9	4.7	0.8	30.4	ホルンフェルス	半欠	
第19図	31	②	005-02	砾石	4.8	4.3	3.8	87.0	砂岩	完存	
第19図	32	①	004-08	寛永通宝	2.8	2.8	0.72	1.75	—	完存	一文銭

第5表 石製品・金属製品一覧表

【遺物一覧表凡例】

※Noは遺物図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。

※土器・陶磁器の残存率は、口縁部ないし底部の周を12分割し、そのうちの残存度を記している。「—」は小片であるなどのため残存度が示せないものである。

※出土遺構欄に「—」と記入しているものは、掘削中に包含層中あるいは表土・造成土中から出土した遺物である。

※調査区欄に「立会」と記入しているものは、工事立会調査時に出土した遺物である。

※調査区欄に「範確」と記入しているものは、範囲確認調査時に出土した遺物である。Noは第1図中のものと対応する。

第VI章 調査のまとめ

第1節 地形環境の復原

①空中写真の判読による微地形

今回の調査区は、現在の海岸線から約0.8~1.6kmの沖積低地に位置する。沖積低地においては地層が側方変化することが一般的であり、同一の地層であっても地点によって全く異なる様相を呈する同時異相の現象が見られることも多い。そして実際の上箕田遺跡の既往の調査においては、多様な地層が確認されており、地形環境復原が試みられている。なかでも安田喜憲氏の環境復原⁽¹⁾では、上箕田遺跡周辺の現在の地形環境が形成された時期が弥生時代以降であると考えられることが指摘されており、その時期が今回の調査によって検出された遺構・遺物の時期とも重なってくる可能性がある。

さて、第7次調査では、断続的に東西に細長く約451.5mのトレンチを開けることになるために、基本層序を把握することが困難になる可能性があった。したがって、調査にあたり微地形を把握するために空中写真の判読を行った(第22図)。

その結果、調査区の周辺には海岸線に平行する方向の高まりが南北方向に4本・直交する方向の高まりが東西方向に4本確認された。の中には、両者の重複する高まりも存在した。海岸線に平行する方向の高まり(a)は砂堆と推定した。直交する方向の高まり(b)は、旧河道が埋没して凸凹が逆転した自然堤防と推定した。両者の重複する高まりは(c)とし、個々に番号を与えて第22図に示した。

以下に、空中写真の判読によって把握できた微地形について、各地点の所見や既往の調査との対応を挙げてみる。なお、碁盤の目に見える地割は表層条里であり、昭和40年代に圃場整備が行われるまで残存していた。

c 1・c 1'：上箕田遺跡周辺で最も内陸部に位置する一連の砂堆(第1列)と推定した。c 1'は自然堤防と重複する。c 1は、東西方向にあまり発達していない点と、c 1の東部に隣接して上箕田遺跡

第3次調査A地区⁽²⁾が位置しており弥生時代前期以降の遺構・遺物が確認されている点から、自然堤防が重複していない可能性もある。

a 2・c 2・c 2'：一連の砂堆(第2列)と推定した。このうちc 2・c 2'は自然堤防とも重複する地点である。a 2は上箕田城址と推定されている地点である。また、上箕田遺跡第3次調査B地区⁽³⁾および第4次調査区⁽⁴⁾に相当する地点であり、弥生時代から中世前期の土器などが確認されている。c 2'は大木ノ輪遺跡調査区⁽⁵⁾に相当しており、弥生時代前期の遺構はこの地点でのみ確認されている。したがって、同砂堆は弥生時代前期には陸化していることが知られる。

なお、この一連の砂堆を境に後述の自然堤防b 1・b 3の東部分は不鮮明になり、自然堤防b 2・b 4はより明瞭に発達している。この点は、自然堤防b 1・b 3については第2列の砂堆以東が安定していなかった時期に形成されたためと考えられ、自然堤防b 2・b 4については第2列の砂堆以西が安定して以降の時期に形成されたためと考えられる。

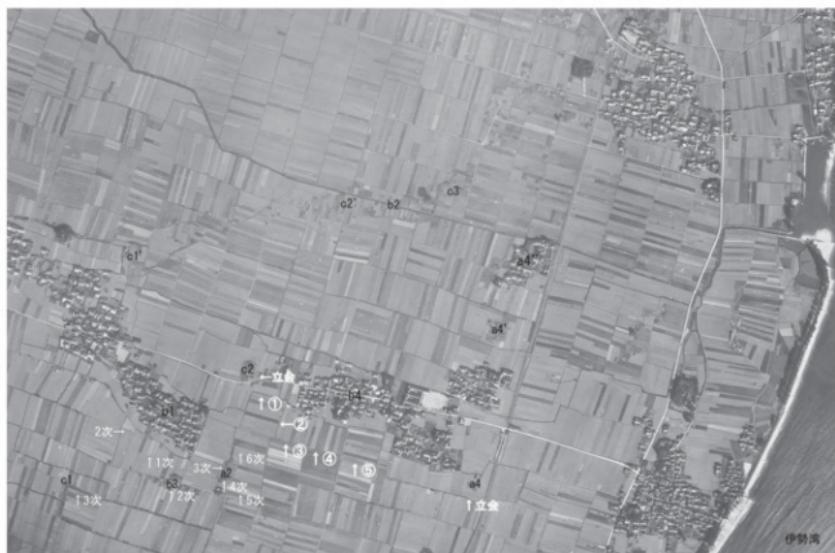
c 3：砂堆(第3列)と推定した。b 2と重複する部分に天ノ宮遺跡⁽⁶⁾が位置しており、縄文土器や弥生時代前期の遺物が出土している。

また、後述の自然堤防b 2はこの砂堆を境に不明瞭になる点から、第3列の砂堆以東が安定していなかった時期に形成されたと考えられる。

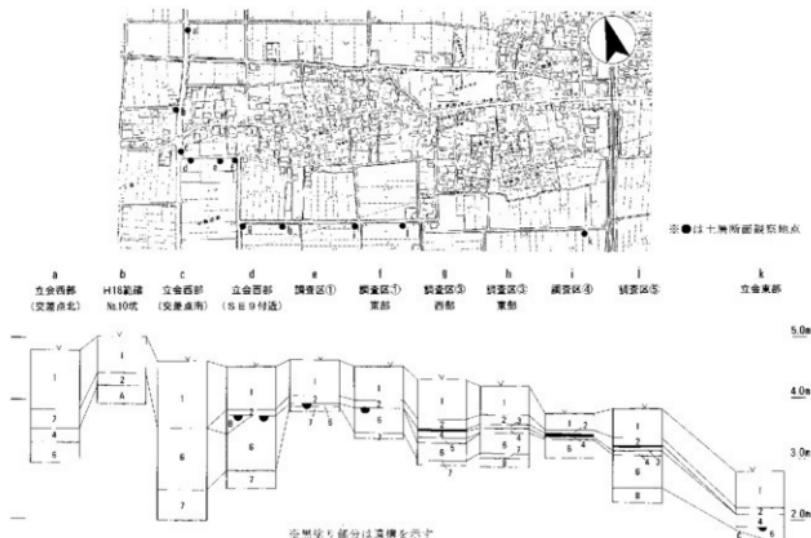
a 4・a 4'・a 4"：一連の砂堆(第4列)と推定した。a 4'には神大寺遺跡⁽⁷⁾が位置しており、古墳時代前期の遺構が確認されている。今回、この砂堆の延長上でも原因事業が計画されていたため、工事立会調査を行った(立会東部地点)。

なお、後述の自然堤防b 4はこの砂堆を境に不明瞭になる点から、第4列の砂堆以東が安定していなかった時期に形成されたと考えられる。

b 1：現在の上箕田集落が立地する北西から南東方向に向かう自然堤防である。現在の上箕田集落から



第22図 上箕田遺跡の調査区と周辺の地形（1948年極東米軍撮影R470-48に加筆）



第23図 第7次調査土層断面模式図

弥生時代前期の遺物が出土したとされる⁽⁸⁾。

また、自然堤防 b 1 が砂堆 a 2 を越える東方への延長上には上箕田遺跡第5次調査区⁽⁹⁾が位置する。この地点は航空写真では明るい色調を呈しており、地下水位が低い地点の特徴を示していることから埋没自然堤防に相当することがわかる。第5次調査区で縄文時代晚期の遺物が出土したV層と弥生時代中期前葉の方形周溝墓が検出されたIV層の間の無遺物層であるV層上面で北方へ低く傾斜する地形が確認されている。この傾斜面は自然堤防と同方向である点から、遙くとも縄文時代晚期以降弥生時代中期前葉までには、自然堤防の形成が開始されている可能性が高いと考えられ、弥生時代中期前葉には自然堤防上で土地を利用し始めていることが分かる。また、砂堆 a 2 を境に自然堤防が埋没している状況を看取できた点からは表層の地形面の形成時期が異なり、砂堆 a 2 以東の地形面の形成された時期が新しいことがわかる。

b 2：この自然堤防上に大木ノ輪遺跡・天ノ宮遺跡は分布する。大木ノ輪遺跡は弥生時代以降の複合遺跡であり、特に平安時代から鎌倉時代にかけての遺物が大量に出土している。弥生時代前期の遺構も確認されているが、砂堆と重複する c 2' 地点に限定される。

b 3：上箕田遺跡第2次調査南区⁽¹⁰⁾に相当する。弥生時代前期以降の遺物が確認されている。

b 4：現在の中箕田集落が立地する自然堤防である。今回、この自然堤防を南北方向に横断する形で因果事象が計画されていたため、工事立会調査（立会西部地点）を行っている。

調査区③南部：地下水位の低い地点でみられることが多い明色を呈している地点がある。第2列の砂堆を隔てて北西方向には自然堤防 b 1 が存在しており、一連の自然堤防が埋没している可能性が高いと推定される。

調査区①～⑤：a～c のいずれにも該当しない後背低地に相当する可能性が高いが、周辺には自然堤防状の高まりと考えられる地点や砂堆と自然堤防が重複する高まりと考えられる地点が複数地点で隣接して見られるところから、同様の高まりが埋没していることも考えられる。

②調査区の地層の様相と微地形

次に、地形的なまとまりごとに実際に現地で観察した地層の所見をみていくことにする。なお、調査区が広域にわたるため、土層断面の模式図（第23図）を作成した。

調査区①・立会西部地点：自然堤防 b 4 を南北に横断する立会西部地点と、自然堤防 b 4 の南部での所見である。自然堤防 b 4 の南部では1層・2層・B層⁽¹¹⁾・6層・7層が確認されており、自然堤防 b 4 の北部では1層・2層・4層・6層が確認されている。

7層は、北西部の立会西部地点および調査区①から南東部の調査区③東部に向かって細繊混じり粗砂混じり中砂～シルトへ細粒化している。明瞭にテミナが確認された点から自然堆積層と考えられ、淘汰が悪く堆積方向が西部から東部方向である点から河成堆積層と考えられる。立会西部地点から調査区①にかけては起伏が激しく約1.1mの高低差があり、北部に向かって標高が急激に落ち込んでいることが分かる。現在の自然堤防 b 4 を隔てた立会西部地点の北部では未確認であるが、少なくとも7層の供給源は調査区①以北に存在することが分かる。また、粒径が急激に変化している点からは、供給源が近くに存在している可能性が高いと考えられる。

6層はシルト～粘土質シルトの漸移的に堆積した地層であり、水性堆積層と考えられる。水性堆積層である6層の堆積方向は西から東に向かっており、この点から河成堆積層であることが分かる。依然として地形は北部に向かって落ち込んでいるが、7層より緩やかな傾斜に変化する。また、現在の自然堤防 b 4 を隔てた立会西部地点の北部においても確認されている。調査区①では6層直上で遺構が確認されているが、上面が非土壤化層であった点から本来は更に上面から掘りこまれたと考えられる。

2層下部では、B層（極細砂）を確認した。テミナが観察されたことから、自然堆積層と考えられる。遺物が含まれていないために時期は不明であるが、13世紀中頃の土器が出土した井戸が上部から切り込んでいることからB層の堆積は13世紀中頃以前と考えられる。B層は立会西部地点の一部でしか確認さ

れなかったが、西部へ行くほど層厚が厚みを増しており、それ以前の地形と逆転し現在の地形と同様の方向の傾斜に変化することから、漸層といえる。

2層は全調査区を通じて確認している近世の耕作土層である。下面で溝を確認している。

1層も全調査区を通じて確認している造成に伴う搅乱層である。

この地点での所見からは、北部に向かって落ち込んでいた地形がB層の堆積によって逆転し、現在の地形が形成されていることが分かる。

調査区③～⑤：後背低地に相当する地点での所見である。1層・2層・3層・4層・6層・7層・8層が確認されている。

複数の調査区で確認された2～4層はほとんど変化がないことから、規模の大きな洪水層によって北西方向から運ばれていることが分かる。また、4層には灰釉陶器や山茶碗が含まれていたことから、中世前期に機能していた地層と考えられる。中世前期には平坦な地形へと変化していたことが分かる。

調査区③西部地点：第2列の砂堆を隔てて存在する自然堤防b1の延長上の埋没自然堤防に最も近接する地点での所見である。1層・2層・4層・5層・6層・7層が確認されている。同埋没自然堤防と考えられる地点に位置する第5・6次調査区では平面調査が2面行われており、弥生時代以降の遺構は同一面で検出されている。かなり削平を受けている点から、調査区③西部で自然堤防から後背低地に向かう緩傾斜面が検出される可能性が考えられたが、実際には確認できず、中世前期の遺物を包含する人為層である4層の下部に、薄く人為層である5層が残存していた。無遺物層であるために所属時期を特定できないが、今回の調査では全調査区を通じて純粹な弥生時代包含層が確認できなかった点と、4層に摩滅した弥生土器が含まれていた点から、6層を母層とし上部を4層に削平されている特徴をもつ5層は、最も自然堤防に近接するこの地点でのみ確認されている点で弥生時代包含層の可能性がある鍵層といえる。

立会東部地点：第4列の砂堆の延長上からやや内陸部へ入った地点の所見である。1層・2層・粘質細

礫混じり極細砂層・粘質シルト層・C層（細礫～極細砂）が観察された。土質の特徴から粘質細礫混じり極細砂層は4層に相当すると考えられ、粘質シルト層は6層に相当すると推定したが、わずかに掘削深度80cmしか確認していない点と、他の調査区とは300m以上離れている点から、必ずしも同一層とは言い切れない。なお4層には中世前期の南伊勢系土師器小皿片が含まれており、4層下部では深さ10cm、幅70cmの浅い窓みが確認された。埋土は灰色シルトで、ラミナが観察されたことから水流があったことが分かる。また窓みの下部には、径1cm以下の炭が含まれていた。

C層は粒径が細礫～極細砂と不揃いで、淘汰が悪い。これらの特徴から河成堆積層であることがわかる。また土壤化しており、ラミナは確認できなかつた。遺物が出土していないことから、時期は不明である。なお、H18範囲確認調査坑No.10地点で確認されたA層と暗色を呈する色調でなおかつ粒径が粗い点では類似するが、A層からは16世紀後半の土師器羽釜が出土しているのに対し、C層は4・6層に相当すると考えられる層より下部で確認されている。これらの点から同一層とは考えにくい。

H18範囲確認調査坑No.10地点：砂堆c2の東部に隣接し、かつ自然堤防b4上に相当する地点である。現地調査時の所見によると、表土である1層、近世遺物を包含する2層（灰茶褐色シルト）の下部ではA層（茶褐色シルト～粗砂層）が確認されている。このA層には弥生土器や16世紀後半の土師器羽釜などが含まれており、洪水砂のような土質であったことから、旧河道と推定された。当該地点は周囲よりも若干標高が高く、現在の地形から考えると砂質という土質のみでは旧河道と断定することはできないが、旧河道から洪水によって氾濫が生じ、自然堤防へと地形変化が生じた時期を決定する可能性が高い点で注目できる鍵層と考えられる。鍵層ではあるが、このA層に相当する地層は隣接する立会西部地点では搅乱のために確認できなかったことから、平成18年度に行った範囲確認調査時の記録を再検討することにした。

調査時に撮影したカラー写真を検討すると、掘削確認したA層の上部約40cmが暗色であり、掘削され

ていない更に下部は明色を呈している状況が確認できる。この点からは上部約40cmが土壌化している可能性が考えられる。また、出土した土器片が摩滅していない点で、出土遺物の由来を洪水層によって誘導されたことに限定することはできない。つまり、出土遺物はA層が堆積し機能していた下限の時期までを示すと捉えるべきであり、その時期が16世紀後半といえる。

③小結

空中写真の判読によって把握できた微地形と各調査での所見から明らかになった点を挙げてみる。

- ① 第3列の砂堆に位置する天ノ宮遺跡から繩文土器が出土しており、第3列までの砂堆は繩文時代に陸化している時期がある可能性が高い。
- ② 第1列の砂堆の東部に隣接して位置する上箕田遺跡第3次調査A地区と第2列の砂堆に位置する大木ノ輪遺跡では、弥生時代前期の遺構が確認されている。したがって、弥生時代前期には第2列の砂堆とその後背低地が陸化しており、生活空間となっていることが分かる。
- ③ 第4列の砂堆は、神大寺遺跡で古墳時代の遺構が確認されていることから、遅くとも古墳時代には陸化していると考えられる。
- ④ 繩文時代晩期の遺構面は、第5次調査で弥生時代中期前葉以降の遺構面から10~90cmの無遺物層を挟んで確認されているのみである。今回の基本層序との対応では、有機物が含まれている点などから、8層が対応する可能性が考えられる。
- ⑤ 広範囲に6層が堆積することによって、第2列の砂堆以東の平坦な地形面が形成された時期は、埋没自然堤防b1の形成時期の下限が弥生時代中期前葉以前であることから、それ以降の時期と考えられる。
- ⑥ 4層は自然堤防b4を挟んで両側で確認された中世前期までの遺物が含まれる機能層であり、調査区全体の土地が利用されるようになるのは中世前期以降のこととなる。つまり、第2列の砂堆以東の地形面が利用されるようになる時期が中世前期以降といえる。
- ⑦ B層・A層は単発的に確認されたのみである

が、自然堤防b4の形成過程の画期となる鍵層である。B層の形成された時期は不明瞭ながら、上部から中世前期の遺物を含む井戸が確認されている点から、中世前期以前と考えられ、A層が堆積し機能していた下限の時期が16世紀後半である。

上箕田遺跡は弥生時代の遺跡として著名な遺跡であるが、今回の調査では古代以降の遺構しか確認されなかった。この点については、地形発達史の視点からは妥当な結果といえる。

註

- (1) 安田喜憲1973「三重県上箕田遺跡における弥生時代の自然環境の変遷と人類」『人文地理』第25巻第2号 人文地理学会
- (2) 三重県教育委員会1971「昭和45年度県営圃場整備事業地内上箕田遺跡調査概要」
- (3) 三重県教育委員会1971
- (4) 鈴鹿市遺跡調査会1985「市道鈴鹿楠線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告」
- (5) 三重県埋蔵文化財センター2008「大木ノ輪遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財調査報告296
- (6) 三重県教育委員会1981「天ノ宮遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告44
- (7) 三重県教育委員会1981「神大寺遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告44
- (8) 三重県立神戸高等学校郷土研究クラブ1961「上箕田弥生式遺跡第一次調査報告」
- (9) 鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会1993「上箕田遺跡」鈴鹿市埋蔵文化財調査報告12
- (10) 鈴鹿市教育委員会・上箕田遺跡調査会1970「上箕田弥生式遺跡第二次調査報告」鈴鹿市文化財調査報告第2編
- (11) 1カ所でしか確認できず、その広がり方が不明な地層は、算用数字で表記している基本層序と区別するために、大文字のアルファベットで記載した。

第2節 遺構・遺物からみた上箕田遺跡東縁部の様相

上箕田遺跡第7次調査で発掘調査を行ったのは、上箕田遺跡として把握されている範囲の東縁部にあたる地区である。これまでの上箕田遺跡における調査の中でも最も東側の調査を行うこととなり、その結果、上箕田遺跡東縁部の様相が明らかになったといえる。本章第1節では当該地域の地形環境の形成過程を概観したが、本節ではそれを踏まえた上で、今回の調査で検出された遺物・遺構などの情報をもとに、中世以前における上箕田遺跡東縁部の人間活動の様相について整理を行っておきたい。

縄文時代から弥生時代の状況 まず、今回の調査では調査区の各所において、部分的に地表下1.3~1.5m付近（標高2.3~3m付近）まで掘削して下層における遺物・遺構の存在の確認を行った。第5次調査で縄文時代の遺物が確認されていることから、今回の調査においても縄文土器などの遺物が出土する可能性を考慮していたが、結果として縄文時代に遡る遺物は全く確認できなかった。

本章第1節で指摘しているように、後背低地であったと思われる調査区近辺は大規模な河川の氾濫などを何度も被るような状況で、広く人間の活動域となってくるのはやや安定してくる古代～中世以前のことであるようである。縄文時代晚期以降には、周辺環境の変化によってある程度は人の活動が可能になってきたものと思われるが、その場所は微高地化が進行していた砂堆や自然堤防の形成箇所等に限られていた可能性が高い⁽³⁾。調査区①～⑤の近辺においては、そうした砂堆や自然堤防の形成が弥生時代以前には顕著ではなく、そのため縄文時代の人間活動の痕跡が認められなかつたものと考えられる。

また、弥生時代の遺物はごく少量出土しているものの、いずれも中世の遺物を含む包含層や造成土・搅乱土の中から出土している。今回の調査では、弥生時代の遺構や包含層は全く確認できておらず、当該地区での弥生時代における人間活動の痕跡は極めて薄いものと考えられよう。中世の包含層から出土した弥生土器はかなり摩滅しており、水流によってどこからか（おそらく西方の集落域付近から）流されてきて堆積したものと想定される。

このように、遺構・遺物の検出状況からみても、上箕田遺跡の東縁部にあたる今回の調査地近辺では弥生時代以前には人間の活動があまり行われておらず、古墳時代から中世前期にかけて周辺の地形環境が変化した結果、人間の活動が可能となっていった地区であると考えができる⁽²⁾。

古代から中世の状況 さて、今回の調査で古代～中世の遺構が検出されたのは、調査区①とその隣接地のみであった。調査区①は、今回の調査区の中で最も西側に位置するとともに、最も北側に位置する調査区である。過去の調査区で調査区①の付近に位置するものは、調査区③のやや西側に位置する第6次調査の調査区である。この調査区では、中世の溝・井戸などが複数検出されている。また、中世の溝が先行して存在している時期不明の溝も検出されており、平安時代後期のものである可能性が指摘されている⁽³⁾。こうした平安時代の遺構に隣接するものとしては、第6次調査の調査区のさらに南側に位置する第5次調査の調査区で、平安時代後期の掘立柱建物が数棟検出されている。

今回の調査では、奈良時代から平安時代に属すると考えられる遺構が検出されたことにより、当該地区まで古代の遺構が広がることが判明した。このことによって、第6次調査で検出された時期不明の溝が、やはり古代に属する遺構である可能性が高まったといえよう。ただし、柱穴など確実に建物に隣接する遺構は調査区①でも検出されず、居住城ではなく、その縁辺にあたるものと思われる。調査区①は、古代における上箕田遺跡の東縁であるとともに北縁ともなっていたとみることができよう。

こうした古代の状況は、中世にも引き継がれる。調査区①では土坑・ピットなどの中世の遺構を検出したが、その数は少なく、居住城として機能していた様子は認められない。工事立会調査では調査区①の隣接地から自然流路や井戸が検出されていることをみても、様相としては、やはり第6次調査区での状況に類似しているものとみられる。

この調査区①および隣接地の工事立会調査の結果、これまで上箕田遺跡として把握されていた遺跡

の範囲がより北側へ広がることが確認された。これによって、従来は上箕田北遺跡として把握されていた遺跡と上箕田遺跡とがより近接することとなる。上箕田北遺跡の南側隣接地でおこなった範囲確認調査（第1図H18範囲確認調査坑No10）では中世の遺物が出土しており、上箕田遺跡から上箕田北遺跡にかけて、一連の中世の生活域が広がっている可能性が想定できよう。ただし、上箕田北遺跡南側隣接地の範囲確認調査で確認されたのは、シルト～粗砂からなる層中に遺物が含まれている状況のみで、遺構は確認できていない。居住域もしくは生産域として上箕田遺跡東縁部と上箕田北遺跡とが連続性を持っていたかどうかは、上箕田北遺跡の内容が明らかになってから判断すべきであろう。

一方、調査区③～⑤では古代～中世の遺構は検出されなかつた。のことからみて、調査区③の西側の南北方向に走る道路付近をはば境界として、それより東側では古代～中世にかけての人間の活動の痕跡は極めて希薄であるとみることができる。調査区③の西側で行われた第6次調査の調査成果からは、第6次調査の調査区付近が中世に生産域として機能していたと推定されているが⁽¹⁾、調査区③～⑤付近については溝などの遺構が全く検出されなかつたことなどから、当該地区がどの程度水田などの生産域として開発されていたかは不明であるといわざるを得ない⁽²⁾。

一方で、これらの調査区からは古代～中世の遺物が比較的多く出土したことは注目される。地形的にみれば、標高がやや高くなっている今回の調査地の西側にあたる地区から流れ込んできた遺物であると考えられる。調査時の所見によれば、やはり調査区③の西側でやや多く遺物が出土している。遺構が認められない地区にこれだけの量の遺物が流れ込んできていることは、今回の調査地のより西側にある程度の規模をもつ居住域などが存在していたことの証左となろう。

盛行時期 これらの調査区③～⑤出土の古代～中世の遺物には、時期的にやや偏りがある。遺物が多い時期としては、まず10世纪代の平安時代後期で、灰釉陶器では猿投窯跡群編年⁽³⁾のO53～H72号窯式期にあたる時期である。そして次に12世纪末～13世

紀代の鎌倉時代で、山茶碗では藤澤編年⁽⁴⁾の第5～8型式にあたる時期である。

この2時期以外の時期の遺物は量的に少ない。この2時期の間にあたる11世纪～12世纪前半の遺物も出土しているものの、やはり少いようである。同様の傾向は、調査区①・②においても認められる。また、調査区①の西側隣接地の工事立会調査では15世纪～16世纪前半頃の戦国時代の遺物が目立って出土しているが、調査区①～⑤から出土した遺物にはこの時期の遺物はそれほど多くはないようである。

こうした情報を積極的に評価すれば、上箕田遺跡の東縁部では古代～中世にかけて連絡と人間の活動が行われていたが、特に10世纪代と12世纪末～13世纪の2時期においてその活動が活発であったと想定することもできよう。これが当該地域の自然環境変化などによるものか、それとも社会的変化によるものかという点については、今後の調査における課題の一つとなるのではなかろうか。

註

- (1) こうした点については、これまでにも上箕田遺跡周辺の地形環境の変化の検討から指摘されている。
安田喜憲1973「三重県上箕田遺跡における弥生時代の自然環境の変遷と人類」『人文地理』第25巻第2号 人文地理学会
- (2) 安田喜憲によても、7～8世纪の間に上箕田遺跡周辺の地表面の微起伏を決定するような自然堤防の形成が行われた可能性が指摘されている(安田1973)。ただし、今回の調査成果からみれば(本章第1節)、弥生時代以降の大規模な自然堤防の形成は安田が指摘する時期よりもやや遅い時期にも続いている可能性がある。後に述べるような遺物からみた遺跡の盛行時期からも、こうした可能性が補強できるのではないかろうか。
- (3) 鈴鹿市教育委員会1996「上箕田遺跡発掘調査報告」「鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ」
- (4) 鈴鹿市教育委員会1996
- (5) 近世の溝SD1が現道に沿ってのびていることからみれば、現在地表面で確認できる耕地の地割りは、遅くとも近世には確立していたものと考えられる。
- (6) 猿投窯跡群の編年については主として以下の文献を参考にした。
柄崎彰一・斎藤孝正1983「猿投窯の編年について」「愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)」 愛知県教育委員会、斎藤孝正1994「東海地方の施釉陶器生産」「古代の土器研究－律令の土器様式の西・東3－」 古代の土器研究会、山下峰司1995「灰釉陶器・山茶

第3節 結語

上箕田遺跡は、これまでにも6次に及ぶ調査が行われてきており、その中で縄文時代から近世にわたる各時期の遺構・遺物が検出され、当該地域の中でも重要な遺跡としての位置づけがなされてきた。

今回の調査で、そうした上箕田遺跡の東縁部の様相が明らかになった意義は大きい。上箕田遺跡は弥生時代の遺跡として調査が始められ、また弥生時代の遺構・遺物で目立ったものが検出されてきたため、これまで主に弥生時代の遺跡として注目されてきた面がある。それに対して、今回の調査では、古代・中世の遺構をいくつか検出することとなり、第5次・第6次調査の成果と合わせて、遺跡東縁部での古代から中世にかけての人間活動の展開を考えさせるような成果を得ることができた。これにより、弥生時代以外にも古代・中世にわたる複合的な遺跡としての上箕田遺跡の様相がより明確になってきたといえるのではなかろうか。

それとともに特筆されるのは、今回の第7次調査では、幅は狭いものの延長数百mに及ぶ調査区を調

査し、それによって上箕田遺跡周辺の土層の堆積状況と遺構の広がりとの関係性が広範に確認できたことであろう。これによって、縄文時代晚期から近世に至るまでの上箕田遺跡周辺の地形的環境についてある程度明らかにすることができたといえる。

以上のような成果は、長期にわたる人間活動の累積によって上箕田遺跡が形成されてきた過程を、多角的に跡づけていくための重要な手がかりとなるといえよう。

第II章でも述べてきたように、歴史上において上箕田遺跡周辺の地域は、鈴鹿川下流域、ひいては伊勢地域の中でも重要な位置を占める地域の一つであった。そうした地域の、まさに中心的な場所に位置する上箕田遺跡の形成過程に関する多角的な検討は、当該地域の歴史的な重要性を再認識するための大きな手がかりとなるものと考えられる。今回の発掘調査成果が、こうした点において寄与できれば幸いである。

写 真 図 版



調査区③～⑤遠景（南西から）



調査区①調査前状況（東から）



調査区③～⑤調査前状況（西から）

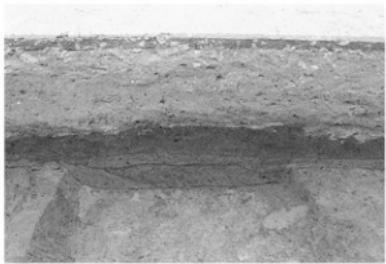


調査区①全景（東から）

写真図版 2



SD 2 (西から)



SD 2 土層断面 (南から)



SD 3 (西から)



SK 5 (東から)



SD 6 (東から)



調査区①東端土層断面 (南東から)



調査区②全景 (南から)



調査区③全景（西から）



調査区④全景（西から）



調査区⑤中央部分全景（西から）



調査区⑤東側部分全景（西から）

写真図版 4



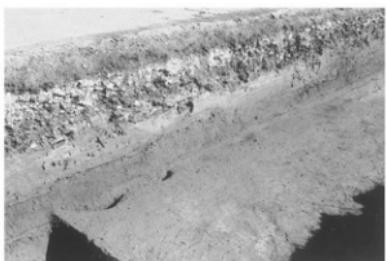
SD 1検出状況 (調査区③)



SD 1土層断面 (調査区③)



SD 1掘削状況 (調査区④)



SD 1掘削状況 (調査区⑤)



調査区③西端土層断面 (南から)



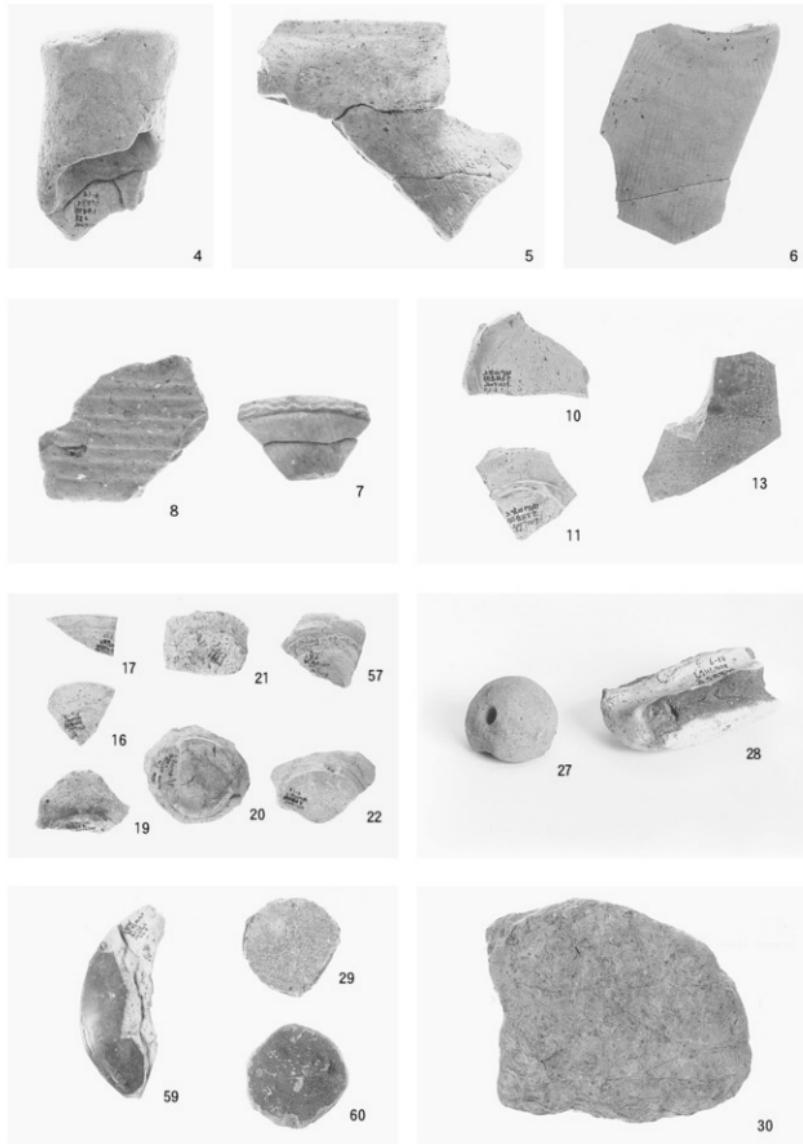
調査区④東端土層断面 (南東から)



SE 9 土層断面 (南から)

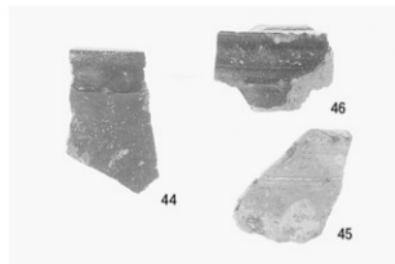
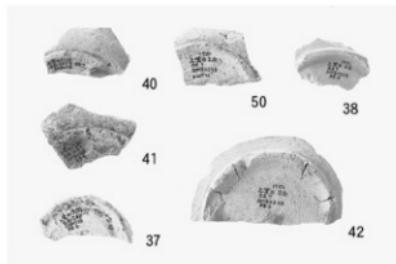


調査区①工事状況 (西から)



本調査・範囲確認調査出土遺物

写真図版 6



工事立会調査出土遺物

報 告 書 抄 錄

三重県埋蔵文化財調査報告299

上箕田遺跡(第7次)発掘調査報告

2008年9月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 (有)山 文 印 刷
